

報告書



調査報告書 筑波大学所蔵《賢儒図像扁額模本》

中根 恭子

はじめに

筑波大学において、全二幅から成る狩野山雪筆《歴聖大儒像》のうち程伯子、張子、朱子、周子、程叔子、邵子の六幅が所蔵されていることはすでに周知のことである。これらの像は『昌平志』の記述により、湯島聖堂において、釈奠という孔子を祭る儀式を行う際に孔子像を中心に従祀して掛けられていたとされる(1)。

『昌平志』にはさらに、湯島聖堂内には先賢先儒八九人を描いた一六枚の扁額が掛けられていたとされ、元禄元年(一六八八)狩野益信が「賢儒図像」を一六枚制作したものの、元禄一六年(一七〇三)罹災焼失し、宝永元年(一七〇四)狩野常信により、再び制作されたことが記されている(2)。聖堂は、その後安永元年(一七七二)、天明六年(一七八六)の二度に渡り、類焼するが、その際「賢儒図像」が災を免れたか否かは不明とされている(3)。今回調査対象となる、筑波大学所蔵《賢儒図像扁額模本》は、前述のいずれかの図か、あるいはその流れを汲んだものを、松谷天来なる人物に模写されたも

のとみられる。しかし、杉原たく哉氏の論文において紹介されるまで(4)、大学内においてさえもその存在を知る者は少なかったとみられる。

本稿においては、この《賢儒図像扁額模本》に関する調査報告を目的とし、本図の現状及び状態を中心に記述したい。

尚、本図の名称については、文献上に、本図を指すとみられる語が登場するが、「賢儒像」「賢儒像扁」「賢儒圖(図)像」「いずれも『昌平志』(5)あるいは「七十二賢及び先儒の畫(画)像扁額」「先賢先儒の畫(画)像(いずれも『聖堂略志』(6)などと、同じ文献上においても呼称は定まっていなかった。

また本図は、現在筑波大学附属図書館内において、現在貴重図書として指定されておらず、配架記号も付けられていない。しかし、筑波大学の前身、東京高等師範学校の管理時に捺されたとみられる図書館内分類番号印及び、東京文理科大学の管理時に貼られたとみられる図書館内分類番号シールを元に調べると、『東京高等師範学校図書館和漢書書名目録』(7)及び『東京文理科大学附属図書館和漢書分類目録』(8)においては、すでに「賢聖障子圖(図)」と記されている。

「賢聖障子」とは、『東洋画題綜覧』(9)『古事類苑』(10)『上代倭絵全史』(11)によると、平安京内裏紫宸殿に所在し、漢唐代の功臣三二人を描いた障子絵を指している。その三二人の内訳も、筑波大学所蔵の本図と一致する人物は、董仲舒ぐらゐである。『古事類苑』には、「面皇居南庇東西障子、作歴代鴻儒像、所謂紫宸殿賢聖像是也」(『本朝画史二 上古画録』)とある。また、平安時代初期に賢聖障子図が作成された背景には、朝廷が釈奠を執り行うなど、儒教的統治方針を布いていた点を指摘されており(12)、《歴聖大儒像》や本図が作成された背景と、極めて類似している。本図が、東京高等師範学校に受け入れられるにあたり「賢聖障子図」と題されたのは、このような点に加え、内裏造営の際、代々の狩野派が紫宸殿における《賢聖障子図》の制作に携わったことも考慮に入れ、他に替わる名称もなかったために付けられたと考えられる。本図に関してはこれまでに十分な論考がなされてなかったこともあり、《賢聖障子図》とは明らかに内容の異なる図を指すため、本稿においては《賢聖障子図》という名称を改め、《賢儒図像扁額模本》という名称を使用することとした。

一、資料の現状

作品名 《賢儒図像扁額模本》
作者 松谷天来(模写)か
制作年代 不明
所有者 筑波大学
材質形状 紙本墨画
数量 一四枚

法量 各図ごとに後記

各図裏に朱文方印「松谷天来粉本之印」、朱文方印「東京高等師範学校図書館印」あり

その他に東京高等師範学校の管理時に捺されたとみられる図書館内分類番号印及び、東京文理科大学の管理時に貼られたとみられる図書館内分類番号シールあり

二、本学附属図書館所蔵に至る経緯

《歴聖大儒像》は、記録及び印により、筑波大学附属図書館に所蔵される経緯を知ることができる。略述すると、明治四年(一八七二)の昌平坂学問所閉鎖に伴い、「浅草文庫」と称する旧米倉に移され(13)、さらにその後当時湯島聖堂構内にあった教育博物館(現在の国立科学博物館)に戻される。そして、明治四〇年(一九〇七)聖堂の祭祀が廃れてしまったことを遺憾とした東京高等師範学校(筑波大学の前身)の教官達を中心とする同志によって孔子祭典会が創設され、祭祀を執り行ったと記されている(14)。一方収納されている木箱蓋に貼られた、孔子祭典会委員中村久郎氏に解説文には、大正三年一〇月の日付で「二十一幅皆伝わりて、現今周張以下宗儒の六幅は高等師範学校にあり。其他の十五幅は東京帝室博物館にあり。」と記されている。軸裏には「浅草文庫」印及び筑波移管の際捺された「東京教育大学附属図書館」印のみ認められる点から、六幅が、少なくとも大正三年(一九一四)には東京高等師範学校に、孔子祭を執り行うための聖像として「保管」されていたものと推定される。

それに対し、《賢儒図像扁額模本》は、紙背の「東京高等師範学校図書館印」

及び、東京文理科大学の管理時に貼られたとみられる図書館内分類番号印より、当初から書籍として収蔵されていたとみられる。大正元年（一九一二年）末までの所蔵の和漢書を記す『東京高等師範学校図書館和漢書名目録』には、「賢聖障子図 一六枚」となっていたのに対し、昭和八年（一九三三年）三月末までの所蔵の和漢書を記す『東京文理科大学附属図書館和漢書分類目録』になると、「賢聖障子図（二枚欠） 一四枚」となっている。こうした点は、現在残されている一四枚の図の一部に、泥の付着や、水しみ、すすけている部分が見られる点と合わせ、大正一二年（一九二三年）の関東大震災の際に、二枚を紛失したとされているのを裏付ける（15）。

三、図様並びに状態

本図は、先に述べたように、元々は一六枚から成っていたものとみられるが、現存するのは一四枚に止まっている。

各図には、孔子像の左側（祭壇上に向かって右側）に掛けられていたとみられる扁絵には、画面右上隅に「左ノ一」「左ノ二」「左ノ三」…と記されており、同じく孔子像の右側（祭壇上に向かって左側）に掛けられていたとみられる扁絵には、画面左上隅に「右ノ一」「右ノ二」…と記されている。よって、以下その分類に従って整理することとする。

また、「右ノ七」については、他の扁絵と異なり、画面上にその名称が記されていない。しかし、後に詳述するが、前後の尊名順から「右ノ七」と推定し、分類した。

「左ノ一」（挿図1）

法量（外寸） 縦八九・〇cm 横二〇三・九cm

（内寸） 縦七八・〇cm 横一八八・九cm

（紙継ぎ） 縦（上から順に。以下同じ）

九・一cm 四一・一cm 三八・八cm

横（左から順に。以下同じ）

一八・一cm 一六・八cm 二七・七cm 二七・三cm

二七・六cm 二七・四cm 二七・五cm 二七・七cm

三・八cm

（後補部分）「澹臺滅明」 縦六四・四cm 横二七・八cm

「南宮适」 縦六五・七cm 横三四・四cm

画面右上隅、枠外の上枠部分に「左ノ一」右枠部分に「六尺五寸八分」と併記される。「六尺五寸八分」のさらにその下には、「ふち二寸」と記されている。

そして、各図様の右上には尊名が記される。向かって左から順に「左一 澹臺滅明」「左二 原憲」「左三 南宮适」「左四 商瞿」「左五 漆雕開」とあり、「左五 漆雕開」の左には一段下げて「□ノ内立二尺六寸 同よこ六尺五寸八分」とある。

人物は何れも斜め右前を向く姿態にて描かれる。顔の向きも、「左一 澹臺滅明」のみ右真横を向き、他はすべて身体の向きにならない、右斜め前を向いている。

本図においては「左一 澹臺滅明」「左三 南宮适」に後補の跡がみられる。いずれも、描かれる人物名に変更はないものの、人物の姿態に変更を加えて

いる。すなわち、「左一 澹臺滅明」においては、元の絵は、顔を正面に向け、左手を胸の前辺りで、人差し指を残し、軽く握った状態で、その下方で右手を、広げた書を下げような形であった。それを変更後は、顔の向きを右真横にし、書を胸の辺りから左手で持ち、その下方にて、広げた先を右手で持つ形にしている。「左三 南宮适」においては、右真横を向いていた顔を、左右の人物に合わせ、右正面を向く形に変え、手の状態も、右手を上、左手を下にして、長い杖を握っていたのを、手の上下を逆にするともに、左手は人差し指を残し、軽く握った形に、右手には環状のものを握らせている。靴も元は簡素なものに描かれていたが、装飾的なものに変えられている。また、両人物に共通する点として、毛髪の描き方が、元の絵を含め、他の五人物は一本一本毛がきざされているが、後補のものは、ぼかし塗りするように描かれており、他の一三枚に描かれる人物の毛髪の描き方に酷似しているように見受けられる。加えて、両人物の目に黒目が入れられていない。

印は、折り畳んだ際、一番外側になる「左四 商瞿」の、胸部分の裏面に、朱文方印「松谷天来粉本之印」が、右肩横部分の裏面に、図書館内分類番号印、朱文方印「東京等師範学校図書館印」が並列して、それぞれ捺されている。

また、「左一 澹臺滅明」を除く、人物の左袖には、色を指定するものと思われる薄い文字が認められた。「左三 南宮适」には、「ミト」、「左四 商瞿」には、「アサ」、「左五 漆雕開」には「コン」と読みとれる。「左二 原憲」の四文字は、「ワ」「ニ」「ノ」「ト」にも見えるが、はっきりと読みとれない。状態は、あまりよくなく、汚れと、縦七本、横二本の大きな折り皺を中心に、無数の皺が見られる。折り畳んだ際、外側になる「左四 商瞿」の部分、上辺から膝より上にかけての裏面は、特に泥で汚れている。表面においても、

折れ目に当たる、「左四 商瞿」の膝部分と、「左三 南宮适」の膝部分において、折れ目に沿って、横に汚れが広がっている。汚れは、この他に画面左端中央部分、「左二 原憲」の右袖裾下部分、「左三 南宮适」の下部分においても、少し見られる。「左四 商瞿」の右袖右横には、折れ目に沿って、縦に水しみがあり、その中程には、わずかに破れている。紙継ぎ部分の剥がれも、「左三 南宮适」の下部分、「左四 商瞿」の下部分において、それぞれ下から六cm、二cm程ある。

虫食いを約三―四cm四方の紙で裏面から補修したとみられる痕跡は、全体で一三カ所に及んでいる。針の穴ほどの小さな虫食いは、「左一 澹臺滅明」「左二 原憲」「左三 南宮适」の下半身部分を中心に一〇数カ所に及ぶ。

「左ノ二」(挿図2)

法量(外寸) 縦八九・一cm 横二〇九・三cm

(内寸) 縦七七・二cm 横一九四・三cm

(紙継ぎ) 縦三九・七cm 四一・〇cm 八・四cm

横一九・二cm 二六・一cm 二五・五cm 二五・二cm

二五・八cm 二五・七cm 二五・五cm 二七・九cm

八・四cm

画面右上隅、枠外に「左ノ二」と記される。

「左ノ二」に同じく右上に尊名が記される。向かって左から順に「左六 樊須」「左七 公西赤」「左八 梁鱸」「左九 冉孺」「左十 伯虔」とあり。

人物は、「左六 樊須」は真正面を向き、右手を下、左手を上、両手で書簡を持つている。「左七 公西赤」「左八 梁鱸」「左九 冉孺」はいずれも右斜

め前を向いて立つ。「左七 公西赤」は顔を右真横に向け、左手に書簡を持つ。

「左八 梁鱧」は両手で魚を抱え持つ。「左九 冉孺」は書簡を開き、何か読み上げているような姿態で、「左十 伯虔」は右真横を向き、右手に筆、左手に紙を持ち、何か書いているような姿態にて描かれている。

本図でも、折り疊んだ際、一番外側になる「左九 冉孺」の左肩上半部分裏面に、図書館内分類番号印、朱文方印「東京高等師範学校図書館印」が並列して、左袖部分の裏面に、朱文方印「松谷天来粉本之印」がそれぞれ捺されている。

全人物の左袖には、「左ノ一」同様、色を指定したとみられる薄い文字が認められる。「左七 公西赤」には「白六」、「左八 梁鱧」には「六」、「左九 冉孺」には「アサキ」、「左十 伯虔」には「白六」と読みとれる。「左六 樊須」には上の文字は「三」あるいは「二」と読みとれるが、下の一文字ははつきりと読みとれない。

また、各人物間の上下の枠外に、人物を描く際の枠割りとしたともみられる薄い縦線が、それぞれ四本ずつ引かれているのが、認められる。

状態は、「左ノ一」同様、縦七本、横二本の大きな折り皺が見られるが、泥による汚れは見られない。但し、折り疊んだ際、一番外側になる「左九 冉孺」の顔から上半身にかけての裏面は、煤のような汚れがある。汚れは、左上隅枠外部分、「左十 伯虔」の足左横部分にもわずかに見られるが、全体的には、他図に比べ、少ないといえる。

虫食いを約三―五cm四方の紙で裏面より補修した痕跡は、全体で一四カ所に及んでいる。針の穴ほどの小さな虫食いは、「左六 樊須」「左九 冉孺」「左十 伯虔」の膝下部分を中心に、約二〇カ所にも及ぶ。

「左ノ三」(挿図3)

法量(外寸) 縦八九・五cm 横二一〇・五cm

(内寸) 縦七七・七cm 横一九六・〇cm

(紙継ぎ) 縦四〇・一cm 四一・三cm 七・八cm

横二六・九cm 二六・九cm 二八・〇cm 二七・二cm

二六・六cm 二七・二cm 二六・九cm 二〇・八cm

画面右上隅に「六尺七寸ノ局」「左ノ三」と併記される。

同じく右上に尊名が記される。向かって左から順に「左十一 冉季」「左十二 漆雕哆」「左十三 漆雕徒父」「左十四 商澤」「左十五 任不斉」とあり。

「左十一 冉季」は、身体を右斜め前に向けつつ、顔は左に向け、視線を下に落とす。両手は前で着物の下にて組んでいる。「左十二 漆雕哆」は、顔、身体とも右斜め前を向く。「左十三 漆雕徒父」は、身体を右斜め後ろに向け、顔を「左十四 商澤」へと後ろに振り返る。「左十四 商澤」「左十五 任不斉」は、共に右斜め前方を向き、「左十四 商澤」は書簡を身体の幅ほど開き、読む。「左十五 任不斉」は、左手で軸を持ち、右腕で受けるようにして書簡を広げ、読んでいる。

印は、折り疊んだ際、一番外側になる「左十一 冉季」の左肩横部分の裏面に、図書館内分類番号印、朱文方印「東京高等師範学校図書館印」が並列して、左袖の左横部分の裏面に朱文方印「松谷天来粉本之印」がそれぞれ捺されている。

「左ノ一」「左ノ二」同様、右三人物の左袖には、色を指定したとみられる薄い文字が認められる。「左十三 漆雕徒父」には「アサキ」、「左十四 商澤」には「口カ」、「左十五 任不斉」には「口ロ六」と読みとることができ、「左

七 公西赤「左八 梁鱸」「左十 伯虔」の色と同じではないかと推定する。
「左十四 商澤」「左十五 任不齊」の一字目は、はっきりと、読みとることができない。

人物を描く際の裱割りとしたともみられる薄い縦線は、各人物間の上下の裱外に、それぞれ四本ずつ引かれているのが、この図にも認められる。

状態は、「左ノ一」「左ノ二」同様、縦七本、横二本の大きな折り皺が見られる。泥による汚れは画面左端裱外と、右端裱外にわずかに見られる。また「左ノ二」同様、折り畳んだ際、一番外側になる「左十一 冉季」の顔半分下から左上半身にかけての裏面は、煤のような汚れがあり、その左隣の右上半身部分の裏面においても、わずかに煤汚れが見られる。

この図では、折り畳んだ状態で、できたと見られる水しみが、四カ所見られる。一番大きな水しみが、「左十二 漆雕哆」の右袖裾下部分に折り目に沿って菱形状に広がり、次いで「左十四 商澤」の左袖裾下部分に、やはり折り目に沿って菱形状に広がっており、「左十三 漆雕徒父」の左膝部分及び、画面右端裱外部分二カ所にも折り目に沿って円形に広がっている。「左十四 商澤」の左袖裾下の水しみ左端の紙継ぎ部分は、少し剥がれかけている。

約三―五cm四方の紙で虫食いを裏面から補修した痕跡は、全体で九カ所に及んでいる。針の穴ほどの小さな虫食いは、全人物の膝下部分及び顔より上の部分を中心に、約三〇カ所にも及ぶ。

「左ノ四」(挿図4)

法量(外寸) 縦八九・七cm 横二〇六・二cm

(内寸) 縦七八・一cm 横一九三・七cm

(紙継ぎ) 縦四〇・六cm 四〇・二cm 八・五cm

横二二・五cm 二八・〇cm 二八・五cm 二八・二cm
二八・一cm 二八・三cm 二七・六cm 一五・〇cm

画面右上隅に「六尺五寸八分」「左ノ四」と記される。

同じく右上に尊名が記される。向かって左から順に「左十六 公良孺」「左十七 奚容蒧」「左十八 顔祖」「左十九 句井疆」「左廿 秦商」とあり。

「左十六 公良孺」「左十八 顔祖」「左十九 句井疆」は、共に右斜め前を向き立つ。「左十六 公良孺」は、杖を右手に、「左十八 顔祖」は両手を前で握り、「左十九 句井疆」は着物の下にて両手を組む。「左十七 奚容蒧」は右斜め前方を向きつつ、顔は右真横を向け、書物を両手で持つ。「左二十 秦商」右斜め後ろを向きつつ、「左十九 句井疆」の方向に視線を向ける。

本図においても、折り畳んだ際、一番外側になる「左十六 公良孺」の左肩横部分の裏面に、図書館内分類番号印、朱文方印「東京高等師範学校図書館印」が並列して、左袖の左横部分の裏面に朱文方印「松谷天来粉本之印」がそれぞれ捺されている(挿図15)。

「左ノ一」「左ノ二」「左ノ三」同様、左四人物の袖、帯紐部分には、色を指定したとみられる文字が認められる。但し、先の三枚と異なるのは、本図には、はっきりと墨書きされている点である。「左十六 公良孺」の右袖には「六」、「左十七 奚容蒧」の左袖には「アサキ」、「左十八 顔祖」の左袖及び帯紐にはそれぞれ「□七」「シト」と読みとれる。「左十八 顔祖」の左袖の一字目は「共」とも読みとれるが、はっきりしない。また「左十九 句井疆」の左袖には三文字認められるが、薄くてはっきりと読みとることができない。

「左ノ二」「左ノ三」に見られた、人物を描く際の裱割りとしたともみられ

る薄い縦線は、この図でも、各人物間の上下の枠外に、上下それぞれ四本ずつ引かれている。

状態は、先の三枚同様、縦六本、横二本の大きな折り皺が見られる他、「左ノ二」同様、折り畳んだ際、一番外側になる「左十六 公良孺」の首から下の左上半身部分の裏側は折り目に沿って、一面煤けている。その左隣の左上半身部分の裏面も、一面やや煤けている。特筆すべきは、一番煤けている裏面の、公良孺なる人物左脇の余白部分の、三つの印の間に、白いチョークのようなもので「焼」の文字が大きく記されている点である(挿図15)。

約三―五cm四方の紙で虫食いを裏面から補修した痕跡は、全体で八カ所に及んでいる。小さな虫食いは、「左十六 公良孺」の膝下部分を中心に、約二〇カ所にも及ぶ。

「左ノ五」(挿図5)

法量(外寸) 縦九〇・一cm 横二二四・〇cm

(内寸) 縦七七・五cm 横二二三・〇cm

(紙継ぎ) 縦四〇・〇cm 四〇・七cm 八・三cm

横二五・五cm 二六・三cm 二七・一cm 二六・四cm

二六・三cm 二七・〇cm 二七・三cm 一九・六cm

一八・五cm

画面右上隅、枠外に「七尺七寸九分」「左ノ五」と記される。

同じく右上に尊名が記される。向かって左から順に「左廿一 公祖句茲」

「左廿二 縣成」「左廿三 燕俛」「左廿四 顔之僕」「左廿五 樂欬」「左廿

六 邦巽」とあり。

「左廿一 公祖句茲」は正面を向きつつも、顔を傾げるように右隣の「左廿二 縣成」へと視線を向ける。「左廿二 縣成」は正面を向き、二匹の魚を載せた皿を両手で持ち、視線を「左廿三 燕俛」へと流す。「左廿三 燕俛」「左廿四 顔之僕」「左廿五 樂欬」「左廿六 邦巽」はいずれも右斜め前方を向き立つ。「左廿三 燕俛」は、両手で持った書を一心に読む。「左廿四 顔之僕」は着物の下で両手を組み合わせる。「左廿五 樂欬」は右人差し指で「左廿四 顔之僕」を指す。「左廿六 邦巽」は、身体の前で両手を握り合わせ、立つ。

印は、本図においても、折り畳んだ際、一番外側になる「左廿二 縣成」の左上半身部分、尊命右横の裏面に朱文方印「松谷天来粉本之印」、人物上方の枠外部分裏面に、図書館内分類番号印、朱文方印「東京高等師範学校図書館印」が並列して、それぞれ捺されている。

先の四枚同様、全人物の袖、裾部分には、色を指定したとみられる文字が認められる。すなわち「左廿一 公祖句茲」の左袖には「コン」と読みとれるが、裾の「三」「二」の二文字ははつきりしない。「左廿二 縣成」の左袖には「黄土」と墨書きされ、さらにその左脇には鉛筆のようなもので「ワウト」と併記されている。「左廿六 邦巽」の左袖には「六」と読みとれ、「左七 公西赤」「左八 梁鱸」「左十 伯虔」の色と同じではないかと推定する。「左廿三 燕俛」「左廿五 樂欬」の左袖は、それぞれ「三□チャ」「シアト□ヤ」とも読みとれるが、不明である。「左廿四 顔之僕」の左袖の二文字もまた不明である。

「左ノ二」「左ノ三」「左ノ四」に見られた、人物を描く際の枠割りとしたともみられる薄い縦線は、この図においても、各人物間の上下の枠外に、上下それぞれ五本ずつ引かれているのが、認められる。

状態については、先の四枚同様、縦七本、横二本の大きな折り皺が見られる他、折り畳んだ際、一番外側になる「左廿二 縣成」の左上半身部分の裏側は折り目に沿って、上下二面とも煤けている上、泥汚れも少し見受けられる。また、「左廿二 縣成」の左上半身部分の裏面隅、「左廿三 燕俣」の顔部分向かって左横及び、右袖裾部分には、破れかけている箇所が見受けられる。

約三―五cm四方の紙で虫食いを裏面から補修した痕跡は、全体で七カ所に及んでいる。「左廿四 顔之僕」足元の向かって左脇余白に貼られた補修紙には、一文字書かれているが、意味不明である。小さな虫食いは、全人物の顔部分及び膝下部分を中心に、約六〇カ所近くにも及ぶ。

「左ノ七」(挿図6)

法量(外寸) 縦九〇・六cm 横二〇三・九cm

(内寸) 縦七七・四cm 横一九一・三cm

(紙継ぎ) 縦四〇・六cm 四一・四cm 七・九cm

横一二・七cm 二八・〇cm 二七・八cm 二八・一cm

二七・四cm 二八・三cm 一三・七cm 一〇・七cm

二一・〇cm 六・二cm

画面右上隅に「六尺五寸八分」「左ノ七」と記される。

同じく右上に尊名は記される。向かって左から順に「先儒左一 左丘明」

「先儒左二 穀梁赤」「先儒左三 高堂生」「先儒左四 毛萋」「先儒左五 杜

子春」「先儒左六 王通」とあり。

いずれの人物も右斜め前を向き立つ。「先儒左一 左丘明」は右手で杖を持

ち、視線を下に落とす。「先儒左二 穀梁赤」は、左手で書卷を持ち、「先儒左三 高堂生」へと、視線を流す。「先儒左三 高堂生」は、両手を着物の下で組み、視線を右斜め前方へと落とす。「先儒左四 毛萋」は右人差し指で「先儒左五 杜子春」を指す。「先儒左五 杜子春」は両手で書卷を掲げるようにして持つ。「先儒左六 王通」は、両手を着物の下で組み、顔、視線共に、左下へと向けている。

印は、折り畳んだ際、一番外側になる「先儒左三 高堂生」の上半身部分の裏面、人物上方の枠部分に、図書館内分類番号印、朱文方印「東京高等師範学校図書館印」が並列して捺されている。朱文方印「松谷天来粉本之印」は、「先儒左一 左丘明」の裾の左脇余白部分、裏面に捺されている。

先の五枚同様、左五人物の袖、裾部分に、色を指定したとみられる文字が認められる。すなわち「先儒左二 穀梁赤」の左袖、裳にそれぞれ「アサ」「スミ」、「先儒左四 毛萋」の左袖、裳裾にそれぞれ「白六」「シト」「先儒左六 王通」の左袖、左裳裾にそれぞれ「スミ」「ニ〇二」と読みとることができる。「先儒左三 高堂生」の左袖、左裳裾はそれぞれ「ニ〇」「白コン」と、「先儒左五 杜子春」の左袖、裳裾は「ニノ三」「ヤユキ〇」とも読みとれるが、不明である。

「左ノ二」「左ノ三」「左ノ四」「左ノ五」に見られた、人物を描く際の枠割りとしたともみられる薄い縦線は、この図においても、各人物間の上下の枠外に、上下それぞれ五本ずつ引かれているのが、認められる。

状態については、先の四枚同様、縦七本、横二本の大きな折り皺が見られる他、折り畳んだ際、一番外側になる「先儒左三 高堂生」の顔から上部分の裏側は折り目に沿って一面、煤けている上、泥が付着している。その隣接する下の面、さらにその下の面においても、若干の煤けが見られる。汚れは、

「先儒左二 穀梁赤」の上方縁においては横に、「先儒左三 高堂生」と「先儒左四 毛萇」の間の上方面においては折れ目に沿って縦に広がっている。「先儒左六 王通」の顔先には、しみが三カ所見られる。

虫食いを約三―五四方の紙で裏面から補修した痕跡は、全体で九カ所に及んでいる。「先儒左四 毛萇」足元の向かつて左脇余白に張られた補修紙は、表から貼られている上、「かん」と書かれている。また、「先儒左二 穀梁赤」足元の向かつて左脇余白に張られた補修紙は、虫食いではない。小さな虫食いは、「先儒左二 穀梁赤」「先儒左五 杜子春」「先儒左六 王通」の顔部分及び膝下部分を中心に、約三〇カ所にも及ぶ。

「左ノ八」(挿図7)

法量(外寸) 縦八七・九 cm 横二五二・六 cm

(内寸) 縦七四・八 cm 横二三四・五 cm

(紙継ぎ) 縦三九・六 cm 三九・六 cm 八・七 cm

横二五・八 cm 一五・七 cm 一三・六 cm 一六・八 cm

二六・八 cm 二七・〇 cm 二六・七 cm 二六・五 cm

二六・五 cm 一九・七 cm 二七・五 cm

画面右上隅、枠外に「八尺三寸五分」「左ノ八」と記される。

同じく右上に尊名記される。向かつて左から順に「先儒左七 歐陽脩」「先儒左八 楊時」「先儒左九 陸九淵」「先儒左十 蔡沈」「先儒左十一 許衡」「先儒左十二 陳獻章」「先儒左十三 王守仁」とあり。

いずれの人物も右斜め前を向き立ち、顔、視線も同方向に向ける。「先儒左八 楊時」「先儒左十一 許衡」「先儒左十二 陳獻章」は両手を着物の下で

組む。「先儒左九 陸九淵」は両手で書物を抱え持つ。「先儒左十 蔡沈」は杓を左手で身体の前にて持つ。「先儒左十三 王守仁」は、右手は下げたまま、左手で杓を左脇にて持つ。

印は、本図においては、折り畳んだ際、一番外側になる「先儒左七 歐陽脩」の左裾部分から「先儒左八 楊時」の裾部分にかけての裏面二面に捺されている。朱文方印「松谷天来粉本之印」は、「先儒左七 歐陽脩」裾中央部分に、図書館内分類番号印、朱文方印「東京高等師範学校図書館印」は「先儒左八 楊時」の下方に、上下に並列して捺されている。

先の六枚同様、全人物の袖部分に、色を指定したとみられる文字が、うすうすと認められる。すなわち「先儒左七 歐陽脩」の右袖には「シト」あるいは「シロ」、「先儒左八 楊時」の左袖には「アサ」、「先儒左九 陸九淵」の左裾には「コン」、「先儒左十二 陳獻章」には「六スミ」とそれぞれ読みとることができる。「先儒左十 蔡沈」「先儒左十一 許衡」の左袖の文字はそれぞれ「ロウ」とも読みとれるが、不明である。先儒左九 陸九淵」の左袖の三文字、「先儒左十三 王守仁」の裳裾の二文字は読みとれることはできなかった。

「左ノ二」から「左ノ七」に至るまで見られた、各人物間の上下の枠外における、人物を描く際の枠割りとしたともみられる薄い縦線は、この図においても、上五本、下三本引かれているのが、認められる。但し「先儒左七 歐陽脩」「先儒左八 楊時」「先儒左九 陸九淵」間の下二本の線と、「先儒左八 楊時」「先儒左九 陸九淵」間の上の線、「先儒左十 蔡沈」「先儒左十一 許衡」間の下の線は、汚れや折れ目などと重なったのか、認められない。

状態については、縦一本、横二本の大きな折り皺が見られる他、折り畳んだ際、一番外側になる「先儒左七 歐陽脩」の左裾部分から「先儒左八 楊

「時」の裾部分にかけての裏面二面において汚れがみられる。また、折り畳んだ状態においてできたと思われる水しみが、下の横折り目に沿った、五カ所と、円形の六カ所ある。横広がり水しみは、まず画面右隅枠外に三角形形状に、次いで、「先儒左七 歐陽脩」の膝部分から「先儒左八 楊時」の膝部分にかけてと、「先儒左九 陸九淵」の左膝部分から「先儒左十 蔡沈」の右袖裾部分にかけて、「先儒左十一 許衡」の膝部分、それに「先儒左十二 陳獻章」の左膝部分から「先儒左十三 王守仁」の右袖裾部分にかけての四カ所に、いずれも折り目に沿って、帯状に広がっている。そして「先儒左十一 許衡」の左裾から「先儒左十二 陳獻章」「先儒左十三 王守仁」の右裾に至る間には、円形の水しみが等間隔に六カ所に渡り、広がっている。その他にも、「先儒左十一 許衡」の右袖横の余白部分に、縦楕円形状の小さな水しみ、「先儒左八 楊時」の上方枠外においても帯状の水しみがある。破れ箇所は「先儒左七 歐陽脩」「先儒左八 楊時」間の下方枠外に、上下に二カ所、「先儒左八 楊時」の裾横余白部分に一カ所、先の楕円形状の水しみの上に一カ所、それぞれ小さなものがある。また、「先儒左十一 許衡」「先儒左十二 陳獻章」「先儒左十三 王守仁」の下方において、それぞれ下から六cmほど、四・五cmほど、右横から二cmほど、紙継ぎが剥がれかけている。

虫食いを約三―五cm四方の紙で裏面より補修した痕跡は、全体で九カ所に及んでいる。小さな虫食いは、「先儒左七 歐陽脩」「先儒左八 楊時」「先儒左十一 許衡」の顔部分及び「先儒左八 楊時」「先儒左十 蔡沈」「先儒左十一 許衡」「先儒左十二 陳獻章」の膝下部分を中心に、約五〇カ所近くにも及ぶ。

「右ノ一」(挿図8)

法量(外寸)	縦八八・九cm	横二一〇・四cm
(内寸)	縦七七・六cm	横一九五・六cm
(紙継ぎ)	縦三九・五cm	四一・二cm
	八・二cm	
	横七・五cm	二七・〇cm
	二七・〇cm	二七・〇cm
	一四・六cm	二六・三cm
		二七・〇cm

画面右上隅に「六尺五寸八分」画面左上隅に「右ノ一」とそれぞれ記される。

尊名は左上に記される。向かって右から順に「右一 宓不齊」「右二 公冶長」「右三 公哲哀」「右四 高柴」「右五 司馬耕」とあり。

いずれの人物も左斜め前を向き立ち、「右二 公冶長」を除き、顔、視線も同方向に向けている。「右一 宓不齊」は両手を着物の下で組む。「右二 公冶長」は鐘を両手で挟み立てるように持つ。「右三 公哲哀」は、前屈みになり、左手で筆を執り、右手で無地の書巻を持ち、書き付けようとしている。

「右四 高柴」は、右手の手のひらを前に掲げ、左手で紙を持つ。「右五 司馬耕」は、やや前屈みぎみに、両手を前に指しだし、呼び止めるような姿勢をしている。

印は、折り畳んだ際、一番外側になる「右二 公冶長」の頭部が描かれる面の裏側一面上方に捺されている。朱文方印「松谷天来粉本之印」は、尊名部分と人物の頭部との中間地点に、図書館内分類番号印、朱文方印「東京高等師範学校図書館印」はその上方、裱練上に、並列して捺されている。

この図においては、「左」すべての図に見られた、色を指定したとみられる

文字を認めることはできなかった。

但し、「左ノ二」から「左ノ八」に至るまで見られた、人物を描く際の枠割りとしたともみられる薄い縦線は、この図においても、各人物間の上下の枠外に、上下四本ずつ引かれていたのが、認められた。

状態については、「左」同様、縦七本、横二本の大きな折り皺が見られる他に、折り畳んだ際、一番外側になる「右二 公治長」の頭部が描かれる面の裏面一面において汚れがみられる。また、折り畳んだ状態においてできたと思われる水しみが、「右二 公治長」顔面左脇の余白部分と、「右三 公哲哀」首部分、「右五 司馬耕」尊名下部分の三カ所に、前者二つはほぼ同じ大きさに、後者はそれよりもさらに小さく、それぞれ折り目角に沿って円形に、広がっている。

紙継ぎにおける、大きな剥がれ箇所が二箇所存在している。一つは、画面左隅中央部分において、端から約一七cmほどと、その部分から枠線に沿って上に、六cmほど、はがれている箇所、もう一つは、「画面中央」「右三 公哲哀」の足下部分である。その他にも、「右一 宓不齊」「右二 公治長」間の下方に、小さな破れ箇所がある。

約三―五cm四方の紙で虫食いを裏面から補修した痕跡は、全体で八カ所に及んでいる。小さな虫食いは、一〇カ所ほどで、他図に比べ少ないといえる。

「右ノ二」(挿図9)

法量(外寸) 縦八九・七cm 横二一〇・六cm

(内寸) 縦七八・五cm 横一九八・六cm

(紙継ぎ) 縦(左端上から順に)

四一・二cm 四〇・〇cm 八・五cm

(左端から九・七cm右に、上から順に)

四〇・〇cm 四一・〇cm 九・〇cm

横九・七cm 二六・七cm 二八・三cm 二八・四cm

二八・四cm 二八・六cm 二八・三cm 二八・五cm

三・三cm

画面右上隅の枠外に「六尺七寸」画面左上隅の枠外に「右ノ二」とそれぞれ記される。

尊名は左上に記される。向かって右から順に「右六 有若」「右七 巫馬期」「右八 顔辛」「右九 曹卹」「右十 公孫龍」とあり。

「右七 巫馬期」を除き、いずれの人物も左斜め前を向き立つ。「右六 有若」は両手で自らを指し、前を見つめる。「右七 巫馬期」は左真横を向き立つ前方を見つめ、両手で書巻を広げる。「右八 顔辛」はやや前屈みの姿勢にて、両手で少し広げた書巻に視線を落とす。「右九 曹卹」は両手を広げるようにして、左手に書巻をもち、上方を見上げる。「右五 公孫龍」は、「右五 司馬耕」に似た手の仕草をしつつ、上体はまっすぐに立つ。

印は、「右八 顔辛」の尊名が貼られた面の裏側と、折り畳んだ際、一番外側になる「右十 公孫龍」の左上半身部分が含まれる面の裏側に捺されている。朱文方印「松谷天来粉本之印」は、「右九 曹卹」「右十 公孫龍」間の、人物の腰の高さほどの余白部分に、図書館内分類番号印、朱文方印「東京高等師範学校図書館印」は尊名部分のすぐ上、枠線上に、並列して捺されている。

色を指定したとみられる文字は、先「左」の六枚同様、全人物の右袖部分に、うっすらと認められる。「右七 巫馬期」と「右九 曹卹」の上の二文字

は、それぞれ「コン」「白六シロ」と読みとることができたものの、残りの三人物については、「右六 有若」は「ニクミ」、「右八 顔辛」は「シロウ」、「右十 公孫龍」は「ラロウ」とも読みとれたが、不明である。

また、「左ノ一」を除く、「右ノ一」に至るまでの七枚に見られた、人物を描く際の枠割りとしたともみられる薄い縦線は、この図においても、各人物間の上下の枠外に、上下四本ずつ引かれている。

状態については、「左」同様、縦七本、横二本の大きな折り皺が見られる他に、折り畳んだ際、一番外側になる「右八 顔辛」の尊名が貼られた面の裏側と、「右十 公孫龍」の左上半身部分が含まれる面の裏側二面は、前者後者の順にいずれも、煤で汚れている。

水しみ、破れは見受けられない。但し約三―五cm四方の紙で裏面から虫食いを補修した痕跡は、全体に五カ所ほどで、比較的少ないものの、小さな虫食いは、画面中央「右七 巫馬期」「右八 顔辛」「右九 曹卍」の腰部を中心に三〇カ所ほど存在する。

「右ノ四」(挿図10)

法量(外寸) 縦九〇・四cm 横二〇七・〇cm

(内寸) 縦七八・五cm 横一九一・九cm

(紙継ぎ) 縦四〇・七cm 四一・六cm 八・一cm

横二八・三cm 二八・七cm 二八・三cm 二八・五cm

二八・四cm 二八・四cm 二八・五cm 七・九cm

画面右上隅に「六尺五寸八分」画面左上隅に「右ノ四」とそれぞれ記される。

尊名は左上に記される。向かって右から順に「右十六 后虔」「右十七 公肩定」「右十八 鄒單」「右十九 罕父黒」「右廿 榮旂」とあり。

「右十六 后虔」は真後ろを向き、右手を挙げ、立つ。「右十七 公肩定」は反対に真正面を向いて、右手に杖を持ちつつ立つ。「右十八 鄒單」は、両手を前で組んで立ち、視線を前方下に落とす。「右十九 罕父黒」は両手で書卷を持ち、同じく視線を前方下に落とす。「右廿 榮旂」は左真横を向きつつ、左手を前に差し出す。

印は、「右十八 鄒單」の左側足元部分が描かれた面の裏側と、折り畳んだ際、一番外側になる「右十七 公肩定」の頭部が描かれる面の裏側に捺されている。朱文方印「松谷天来粉本之印」は、「右十六 后虔」「右十七 公肩定」双方の足元の間の余白部分に、図書館内分類番号印、朱文方印「東京高等師範学校図書館印」は「右十七 公肩定」の頭部の真上、枠線外に、並列して捺されている。

「右ノ一」同様、色を指定したとみられる文字を認めることはできなかった。

但し、「左ノ一」を除く、「右ノ二」に至るまでの八枚に見られた、人物を描く際の枠割りとしたともみられる薄い縦線は、この図においても、各人物間の上下の枠外に、上下四本ずつ引かれているのが、認められた。

状態については、「左」同様、縦七本、横二本の大きな折り皺が見られる他に、折り畳んだ際、一番外側になる「右十七 公肩定」の頭部が描かれる面の裏面一面において汚れがみられる。この面の左に隣接する、「右十七 公肩定」の尊名及び、「右十八 鄒單」の頭部が含まれる面の裏側においても、やはり一面汚れがみられるが、特筆すべきは頭部の真上、枠外に、足跡とみられる泥が付着している点である。

また、折り畳んだ状態においてできたと思われる水しみが、「右十六 后度」「右太股部分と」「右十七 公肩定」「右袖裾脇部分」「右十八 廓單」「左袖裾部分」「右廿 榮旂」「左袖裾部分の四方所に、ほぼ同じ大きさに、下の横線折り皺と、縦の折り皺線がぶつかる、それぞれの折り目角に沿って菱形に、広がっている。しみ汚れは、「右十八 廓單」の頭部一カ所と、足元の三カ所にも見られる。画面中央「右十七 公肩定」尊名下の紙継ぎ部分横線において、若干の剥離もみられる。

虫食いを約三―五cm四方の紙で裏面から補修した痕跡は、全体で七カ所ほどである。小さな虫食いは、画面中央を中心に、全人物の胸部あたりに四五カ所ほど広がっている。

「右ノ五」(挿図11)

法量(外寸) 縦八八・九cm 横二二〇・九cm

(内寸) 縦七五・九cm 横二〇八・六cm

(紙継ぎ) 縦三九・〇cm 四〇・三cm 八・七cm

横五・九cm 一九・八cm 二七・九cm 二八・一cm

二八・二cm 二八・四cm 二七・五cm 二七・四cm

二七・七cm

画面右上隅に「七尺卷寸九分」画面左上隅に「右ノ五」とそれぞれ記される。

尊名は左上に記される。向かって右から順に「右廿一 左人野」「右廿二 鄭國」「右廿三 原元」「右廿四 廉絜」「右廿五 叔仲會」「右廿六 狄黒」とあり。

「右廿一 左人野」「右廿三 原元」「右廿六 狄黒」はいずれも左斜め前方を向き立つ。「右廿三 原元」は着物の下で両手を組む。「右廿六 狄黒」は右手で杖を持つ。「右廿二 鄭國」は左真横を向き左手を軽く挙げている。「右廿四 廉絜」は真正面を向き、両手で紙を前に下げ持つ。「右廿五 叔仲會」は前方を向きつつも、右に首を傾げ、視線も右下に落とす。

印は、折り畳んだ際、一番外側になる「右廿四 廉絜」の頭部が描かれる面の裏側一面上方に捺されている。朱文方印「松谷天来粉本之印」は、頭部の左上に、図書館内分類番号印、朱文方印「東京高等師範学校図書館印」はその上方、枠線上あたりに、並列するように捺されている。

色を指定したとみられる文字も、先「左」の六枚及び「右ノ二」同様、「右廿四 廉絜」を除く、全人物の袖部分に、うっすらと認められた。「右廿二 鄭國」「右廿三 原元」の右袖には、それぞれ「シロ」「白六」と読みとることができたものの、残りの三人物及び「右廿三 原元」の右裾部分については、「サワン口」、「右廿一 左人野」「右廿五 叔仲會」は、それぞれは右袖に「シキラ」、「カサ」と、「右廿六 狄黒」は「カ口」とも読みとれたが、不明である。

また、「左ノ一」を除く、「右ノ四」に至るまでの九枚に見られた、人物を描く際の枠割りとしたともみられる薄い縦線は、この図にも、各人物間の上下の枠外に、上下四本ずつ引かれているのが、認められる。

状態については、「左」同様、縦七本、横二本の大きな折り皺が見られ、特に縦折れ線の皺が多い。また、泥と水しみによる汚れが著しく、折り畳んだ際、一番外側になる「右廿四 廉絜」の頭部、印を含んだ面を中心として、「右廿四 廉絜」から「右廿五 叔仲會」にかけて、人物の頭上部分の紙背二面及び「右廿四 廉絜」の胴体部分が描かれる面の紙背は、特に泥で汚れる。

ており、「右廿四 廉絜」の両手の辺りは水しみが広がり、紙背には靴の足跡とみられる汚れが付着している。水しみのような汚れは、「右廿一 左人野」「右廿二 鄭國」「右廿三 原亢」それぞれの上部枠外においても、折り目に沿って、三角状に広がっており、右廿三 原亢」の上部のものは、他の二カ所に比べ、若干薄いものとなっている。小さな水しみは、「右廿四 廉絜」右肩部分、「右廿三 原亢」顔面右脇部分「右廿一 左人野」首部分の三方所、「右廿四 廉絜」のが染みたとみられる「右廿三 原亢」右腕部分、さらに「右廿六 狄黒」の左胸部においても、それぞれ折り目角に沿って、広がっている。

虫食いを約三―五cm四方の紙で裏面より補修した痕跡は、全体で一―三カ所ほどである。この他に虫食いではないものの、補修したと見られる痕跡が、「右廿六 狄黒」の右足部分にみられる。小さな虫食いは、人物の胸部あたりを中心に二〇カ所ほど広がっている。

「右ノ六」(挿図12)

法量(外寸) 縦八八・五cm 横二〇五・四cm

(内寸) 縦七七・〇cm 横一九四・二cm

(紙継ぎ) 縦三九・八cm 三九・八cm 八・九cm

横五・一cm 二七・六cm 二八・〇cm 二八・五cm

二八・四cm 二八・三cm 二八・一cm 二八・三cm

三・一cm

画面右上隅の枠外に「六尺五寸八分」、画面左上隅の枠外に「右ノ六」それぞれと記されている。

左上に尊名記される。向かって右から順に「右廿七 孔忠」「右廿八 施之常」「右廿九 秦非」「右三十 申根」「右三十一 顔會」とあり。「右廿七 孔忠」は左斜め後方を向き、左手に弓、右手に矢を持ち、視線を左へと向ける。「右廿八 施之常」「右廿九 秦非」はいずれも左斜め前方を向き立つ。「右廿八 施之常」は右手を軽く挙げ、「右廿九 秦非」は右手に矢、左手に紙を持つ。「右三十 申根」は左真横を向き右手を軽く挙げる。「右三十一 顔會」は真正面を向き、立つ。

印は、折り疊んだ際、一番外側になる右三十 申根」の裾部分が描かれる面の裏側一面下方枠上に捺されている。朱文方印「松谷天来粉本之印」は、人物の足元に、朱文方印「東京高等師範学校図書館印」はその右、枠線上あたりに並列するように、図書館内分類番号印はさらにその右下枠線より下に、捺されている。色を指定したとみられる文字は、認められない。

しかし、「左ノ一」を除く、「右ノ五」に至るまでの一〇枚に見られた、人物を描く際の枠割りとしたともみられる薄い縦線が、この図にも、各人物間の上下の枠外に、上四本、下三本引かれている。但し「右廿八 施之常」「右廿九 秦非」間の下の線は認められなかった。

状態については、「左」の図同様、縦七本、横二本の大きな折り皺が見られる他、中央部分にも、横一線に皺が広がっている。

本図では、「右三十 申根」「右三十一 顔會」の裏面を中心に、汚れが著しい。「右三十一 顔會」部分の紙背六面は全面的に泥で汚れ、特に上部と下部は甚だしく、下部の人物足元においては靴の足跡と見られるものが、四五個認められた。一部泥汚れは、左下枠外において、表にまで及んでいる。表面の汚れは、「右廿九 秦非」の足元、画面右下隅枠外においても、縦に広

がっている。また、汚れの著しい「右三十一 顔會」の隣に面し、折り畳んだ際、一番外側になる「右三十 申根」の人物部分の紙背三面は、折り目に沿って、全面的に煤けている。

裏面から約三―五cm四方の紙で虫食いを補修した痕跡は、全体で六カ所ほどである。小さな虫食いは、「右廿九 秦非」の胸部あたりを中心に一〇カ所ほど広がっている。

(「右ノ七」)(挿図13)

法量(外寸) 縦九〇・〇cm 横二〇四・二cm

(内寸) 縦七九・三cm 横一九三・〇cm

(紙継ぎ) 縦四〇・三cm 四一・二cm 八・五cm

横一〇・三cm 二八・六cm 二八・八cm 二八・四cm

二八・五cm 八・一cm 一六・五cm 一四・六cm

一四・七cm 二五・七cm

画面右上隅、枠外に「六尺五寸八分」と記されているが、画面左上隅には何も記されていない。

左上には尊名が記される。向かって右から順に「先儒右一 公羊高」「先儒右二 伏勝」「先儒右三 孔安國」「先儒右四 董仲舒」「先儒右五 后蒼」「先儒右六 韓愈」とあり。次の「右ノ八」が「先儒右七」から始まることから、本図を「右ノ七」と仮定することができる。

「先儒右一 公羊高」は左横を向き、書巻を手に行っている。「先儒右二 伏勝」「先儒右三 孔安國」「先儒右四 董仲舒」「先儒右五 后蒼」「先儒右六 韓愈」はいずれも左斜め前方を向き、立つ。このうち、「先儒右二 伏勝」「先

儒右三 孔安國」「先儒右四 董仲舒」の三人は、着物の中で両手を組んでいる。「先儒右五 后蒼」「先儒右六 韓愈」は左手を挙げ、右手を下げた姿態であるが、「先儒右五 后蒼」はその左手に書物を、「先儒右六 韓愈」は書巻を抱えている。

本図における印の位置は、は、「先儒右三 孔安國」足部分の紙背に朱文方印「松谷天来粉本之印」が、折り畳んだ際一番外側になる「先儒右二 伏勝」尊名右上、枠外に、朱文方印「東京高等師範学校図書館印」および図書館内分類番号印が並列して、それぞれ擦されている。

色を指定したとみられる文字は、本図においても認められない。

また、「左ノ一」を除く、「右ノ六」に至るまでの一一枚に見られた、人物を描く際の枠割りとしたともみられる薄い縦線は、各人物間の上下の枠外に、この図においても、上下四本引かれている。但し「先儒右二 伏勝」「先儒右三 孔安國」間の上下の線は認められなかった。

状態については、「左」の図同様、縦七本、横二本の大きな折り皺が見られる。その他、中央部分よりやや下に、横一線状に皺が広がっている。

本図では、印の擦されている「先儒右二 伏勝」尊名および頭部が含まれる面、「先儒右三 孔安國」足部分が含まれる面の紙背を中心に、汚れが著しい。「先儒右二 伏勝」尊名および頭部が含まれる面の紙背は、一面煤けている。さらに「先儒右三 孔安國」足部分が含まれる面の紙背は、下部の人物足元を中心に泥が付着しており、枠線上には靴の足跡と見られるものが認められる。足跡とみられる汚れは、隣接する「先儒右二 伏勝」の足元下、枠外においてもうつすらと認められる。

水しみは、「先儒右二 伏勝」尊名と、「先儒右三 孔安國」顔面間、「先儒右四 董仲舒」尊名上、「先儒右六 韓愈」顔面上の三方所に、縦横の折り目

に沿って、滴状に、広がっている他、この三方所のものと同様に染みたとみられる、一回り小さい水しみが「先儒右一 公羊高」の頭部に縦の折れ線に沿っても広がっている。「先儒右一 公羊高」「先儒右三 孔安國」「先儒右四 董仲舒」「先儒右六 韓愈」の足元部分においても、縦の折れ線に沿って菱形状に広がっている。

約三十五cm四方の紙で虫食いを裏面から補修した痕跡は、全体で九カ所ほどである。小さな虫食いは、人物の腰部あたりを中心に二〇カ所ほど広がっている。

「右ノ八」(挿図14)

法量(外寸) 縦八九・六cm 横二五八・八cm

(内寸) 縦七八・一cm 横二四七・〇cm

(紙継ぎ) 縦四〇・一cm 四〇・二cm 九・三cm

横(下辺左から)

二五・五cm 九・七cm 一八・五cm 一三・〇cm 一一・七cm 二

六・五cm 二六・五cm 二七・一cm 二六・七cm

一九・五cm 二六・八cm 二七・〇cm

(下辺から九・三cm上、胡瑗、司馬光部分、左から)

二六・四cm 一九・六cm 二六・四cm

画面右上隅に「八尺二寸五分」「右ノ八」と記される。

同じく右上に尊名記される。向かって右から順に「先儒右七 胡瑗」「先儒右八 司馬光」「先儒右九 胡安國」「先儒右十 呂祖謙」「先儒右十一 張栻」「先儒右十二 真徳秀」「先儒右十三 薛瑄」「先儒右十四 胡居仁」とあり。

人物はいずれも左斜め前方を向き立つ。「先儒右八 司馬光」「先儒右九 胡安國」「先儒右十 呂祖謙」「先儒右十四 胡居仁」は着物の中で両手を組んでいる。「先儒右七 胡瑗」は、右手に書物を、「先儒右十一 張栻」は右手に書巻を、「先儒右十二 真徳秀」は両手で杓を、「先儒右十三 薛瑄」は両手で書物を持っている。

本図における印の位置は、折り畳んだ際一番外側になる「先儒右十一 張栻」「先儒右十二 真徳秀」間、足部分の紙背にあり、朱文方印「松谷天来粉本之印」が、両者の足裾部分の中間地点に、朱文方印「東京高等師範学校図書館印」および図書館内分類番号印はその下、枠線上に並列して、それぞれ擦されている。

色を指定したとみられる文字は、本図においては、「先儒右十二 真徳秀」の帯上のみ「ロマ」と書かれているのが認められる。

また、「左ノ一」を除く、「右ノ七」に至るまでの一二枚に見られた、各人物間の上下の枠外には、人物を描く際の枠割りとしたとみられる薄い縦線が、この図においても、上七本引かれている。但し、下の線は「先儒右八 司馬光」「先儒右九 胡安國」間と、右十一 張栻」「先儒右十二 真徳秀」間のみ、認められた。

状態については、「左」同様、縦八本、横二本の大きな折り皺が見られる。紙の傷みが激しく、「先儒右十三 薛瑄」中心を縦に貫く折れ線の下部分に、二cm程の破れが見られる他、「先儒右十 呂祖謙」が描かれる面左右二カ所と、「先儒右九 胡安國」左足元下一カ所の紙継ぎ部分が、下から約四―七cm程剥がれかけている。

本図には、全体に縦折れ線に沿っての汚れ、紙の摩耗が見受けられる。特に「先儒右十一 張栻」右半身「先儒右十二 真徳秀」左半身が含まれる、

上下三面にかけての紙背の折れ線の汚れや、紙の摩耗が著しい。印の捺されている「先儒右十一 張栻」「先儒右十二 真徳秀」それぞれ裾部分が含まれる面及び、その上の「先儒右十一 張栻」左上半身「先儒右十二 真徳秀」右上半身が含まれる面の紙背は、一面やや煤けている。汚れは、「先儒右十四 胡居仁」の中心を縦に貫く折れ線の枠外、上部と下部にも見られる他、「先儒右十二 真徳秀」の持つ杓脇の余白には、赤インクとみられるものが付着し、画面右横、下方の横折れ線の先、枠外においては墨と見られる汚れが付着している。

泥の付着や、靴の足跡と見られるものは、見受けられない。しかし、水しみが、「先儒右十一 張栻」の顔面左右両脇余白部分にそれぞれ一カ所ずつ、「先儒右十 呂祖謙」の首部分右脇の余白に一カ所、円形状に、等間隔で広がっている。

裏面から約三―五cm四方の紙で虫食いを補修した痕跡は、全体で八カ所ほどである。それに加え、本図においてはさらに「先儒右八 司馬光」の右脇脇余白部分に、「干」とも読みとれる文字を記した紙片で、「先儒右十 呂祖謙」の左足元脇の余白部分に、「かん」と記した紙片で、それぞれ表面より補修している。「先儒右九 胡安國」左顔面部分においては、少し破れかけている箇所を裏面より補修している。小さな虫食いは、人物の腰部あたりを中心に三五カ所ほど広がっている。

おわりに

冒頭にも触れたが、『昌平志』には、湯島聖堂内には先賢先儒八九人を描いた一六枚の扁額が掛けられていたことが記されている。元禄元年（一六八八）

狩野益信が「賢儒圖像」を一六枚制作したのに始まり、元禄一六年（一七〇三）罹災焼失し、宝永元年（一七〇四）狩野常信により、再び制作され、寛政一二年（一八〇〇）十哲の配祀の取りやめと共に撤廃されるまでの期間である（16）。聖堂は、安永元年（一七七二）、天明六年（一七八六）の際にも、類焼するが、その際に「賢儒圖像」が災を免れたか否かは不明とされている。

聖堂内における配祀の仕方についても『昌平志』には記述があり、元禄四年に改作されたとされる《昌平廟学図（正位暨配享従祀諸賢儒方位次序図）》（挿図16）において詳細に記されている（17）。この記述及び図に示される配祀順は、筑波大学所蔵本図の人物の配置順及び、画面端に記された「左ノ一」「右ノ一」の順とも一致している。同時期の元禄四年に描かれたとみられる《聖堂之画図》においても配祀図は示されており（18）、配祀順はやはり全く同じものである。この図においては人物も併せて描かれている。但しその姿態及び画風については、筑波大学所蔵の本図とは全く異なるものである。このような点から見て、筑波大学所蔵の本図は『昌平志』に記される、先賢先儒八九人を描いた一六枚の扁額の下絵を指すものと推定される。

（付記）

本稿は『筑波大学附属図書館所蔵 狩野探幽等江戸時代前期屏風の研究』（筑波大学芸術学系守屋研究室発行 二〇〇二年三月）に所収の「調査報告書 筑波大学所蔵「賢聖障子図」」に加筆修正を加えたものである。尚、本文中においても触れたが、作品名について、先の報告書においては《賢聖障子図》としていたが、今回改めて本図と《賢聖障子図》との違いを考慮の上、《賢儒圖像扁額模本》の名称を使用することとした。

注

- (1) 大家遜『昌平志 卷第一 廟図誌』及『昌平志 卷第五 儀飾誌』一八〇〇年。
なお、参照は以下の文献による。
- 『日本教育文庫 学校篇』同文館 一九一一年 三六一―三七頁、一五一頁。
- (2) 前掲書注1 三三八頁(『昌平志 卷第一 廟図誌』)。
- (3) 三宅米吉・中山久四郎編『聖堂略志』斯文会 一九三五年 五五頁。
- (4) 杉原たく哉「狩野山雪筆歴聖大儒像について」『美術史研究 三〇冊』早稲田大学美術史学会 一九九二年二月 一〇〇頁。
- (5) 前掲書注1 三三八、五八、六八頁(『昌平志 卷第一 廟図誌』)。
- (6) 前掲書注3。二二頁、五五頁。
- (7) 『東京高等師範学校図書館和漢書書名目録』一九一五年 二二〇頁。
- (8) 『東京文理科大学附属図書館和漢書分類目録』一九三四年 七九四頁。
- (9) 金井紫雲編『復刻版 東洋面題綜覧』国書刊行会 一九九六年 二九六頁。
- (10) 『古事類苑 三一 器用部一』吉川弘文館 一九七〇年 八七五―八八三頁。
- (11) 家永三郎『上代倭絵全史』墨水書房 一九六六年 二三一―二六頁。
- (12) 前掲書注1 1。二五頁。
- (13) 阿部弘蔵『浅草文庫 学鑑第七年一―号』一九〇三年一月 七頁。
- (14) 『孔子祭典会々報 第一号』一九〇七年一〇月 一―三二頁。
- (15) 前掲論文注4。一〇〇頁。
- (16) 前掲書注1 三三八、五八、六八、九六頁(『昌平志 卷第一 廟図誌』)。
- (17) 『昌平志 卷第一 廟図誌』参照は以下の文献による。
文部省編『日本教育史資料 七』臨川書店 一九七〇年 四二六―四二七頁。
- (18) 前掲書注3に所収。

その他の参考文献

- 『改訂 内閣文庫国書分類目録下』国立公文書館内閣文庫 一九七五年
『補訂版 国書総目録』岩波書店 一九九〇年
『筑波大学附属図書館所蔵 日本美術の名品―石山寺―切経、狩野探幽・尚信の新出
屏風と歴聖大儒像―』筑波大学附属図書館 二〇〇〇年
須藤敏夫『近世日本積奠の研究』思文閣出版 二〇〇一年
守屋正彦「筑波大学が受け継いだ「学」の象徴―狩野山雪筆「歴聖大儒像」について」
『筑波フォーラム(筑波大学) 五五号』二〇〇〇年三月 九―一五頁

図版凡例

- 一 《賢儒画像扁額模本》については、上部に原図及び款記を配し、下部に状態を記した図を配置した。
- 一 図版中の尊名表記については、原文に則して記している。

図版

挿図1「左ノ二」

六尺五寸八分 ふち二寸



左一
澹臺滅明
クンタイヘツメイ

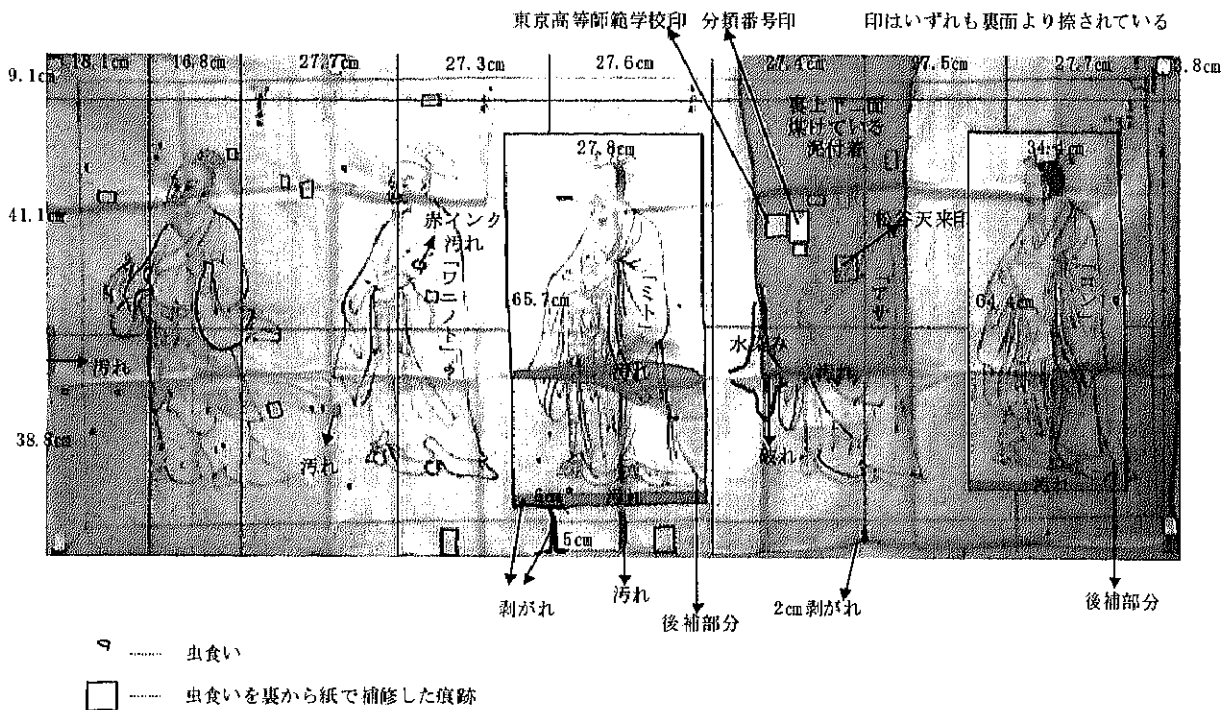
左二
原憲
ゲンケン

左三
南宮适
ナンキウカツ

左四
商瞿
シャウク

左五
漆雕開
シツテウカイ

同
□ノ内立二尺六寸
よこ六尺五寸八分





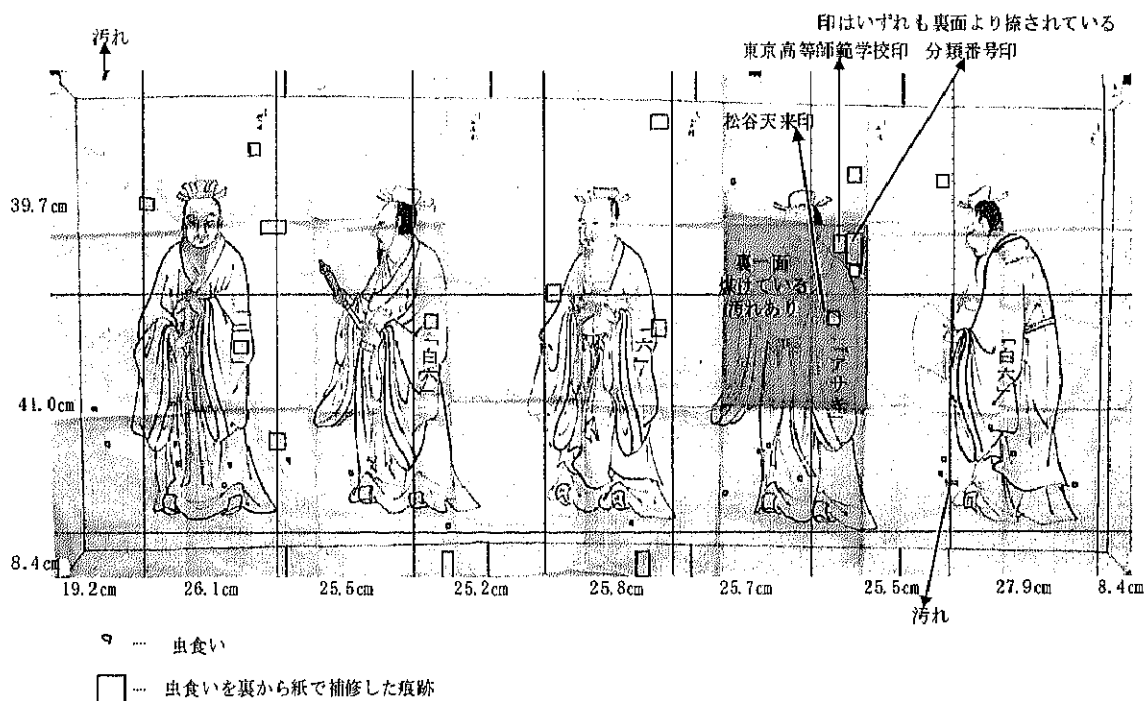
左六
樊須
ハンシユ

左七
公西赤
コウセイセキ

左八
梁鱸
リヤウテン

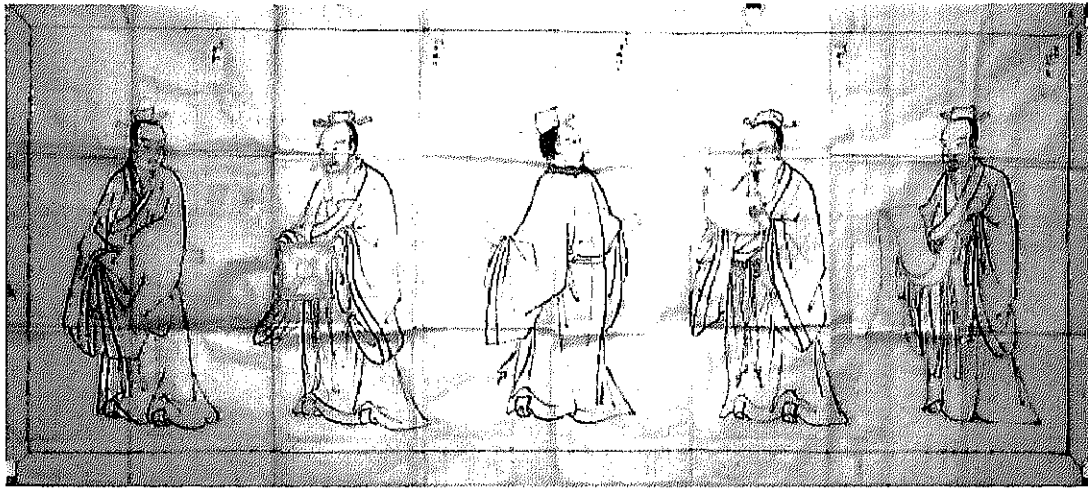
左九
冉孺
センジュ

左十
伯虔
ハクテン

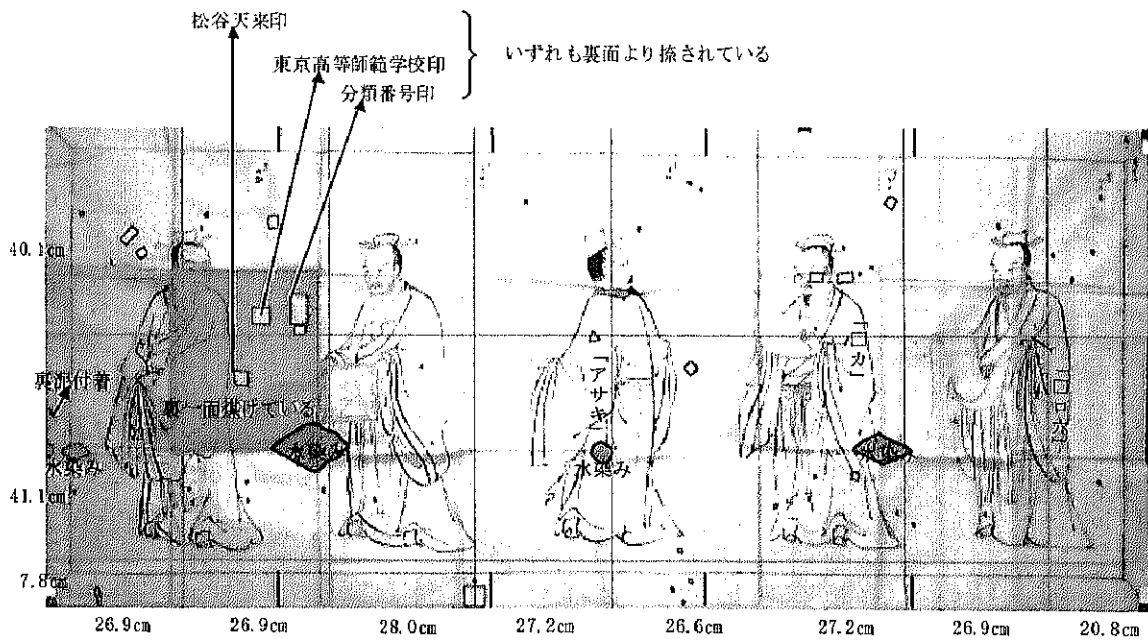


上下の枠外の短い縦線は人物を描く際につけられたと見られる薄い線

挿図3 「左ノ三」 六尺七寸ノ局



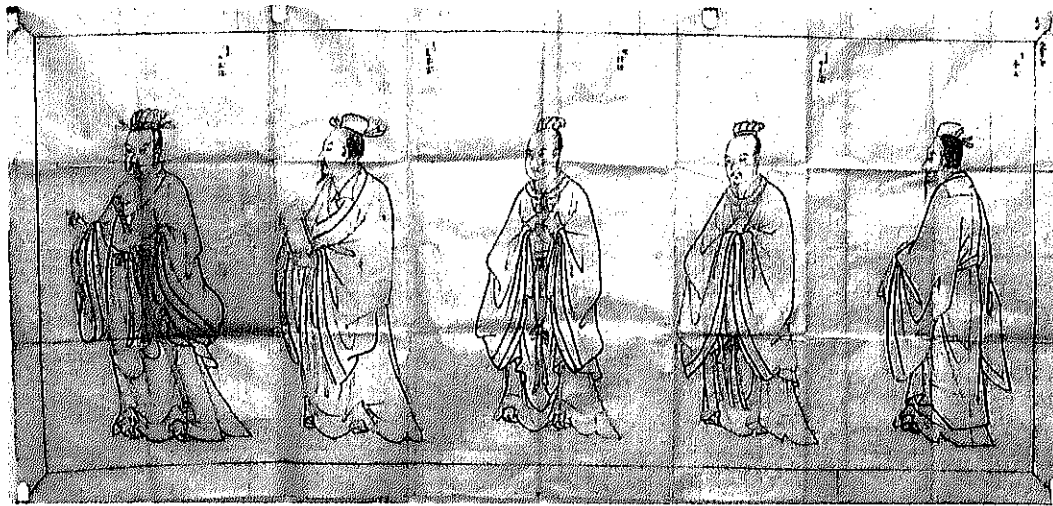
左十一 センキ 冉季
 左十二 シツテウシヤ 漆雕哆
 左十三 シツテウトホ 漆雕徒父
 左十四 シヤウダク 商澤
 左十五 ジンフサイ 任不斉



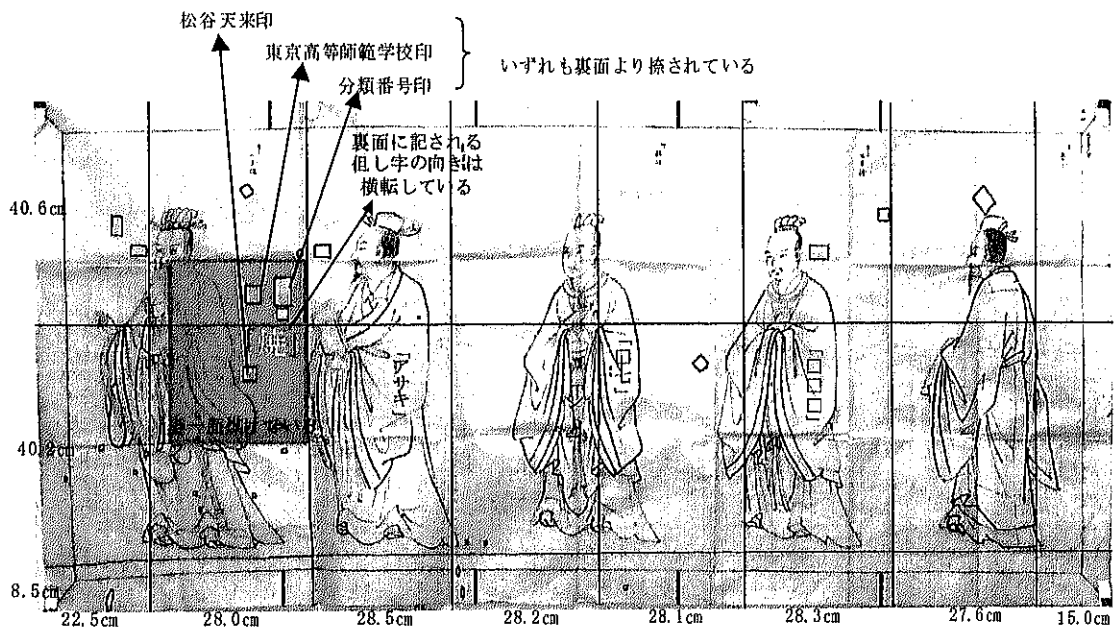
- ... 虫食い
- ... 虫食いを裏から紙で補修した痕跡

上下の枠外の短い縦線は人物を描く際につけられたと見られる薄い線

挿図4 「左ノ四」 六尺五寸八分



左十六 コウリヤウジュ 公良孺
 左十七 ケイヨウテン 奚容蒧
 左十八 ガン 顔祖
 左十九 コウセイキヤウ 匂井彊
 左廿 シンセウ 秦商



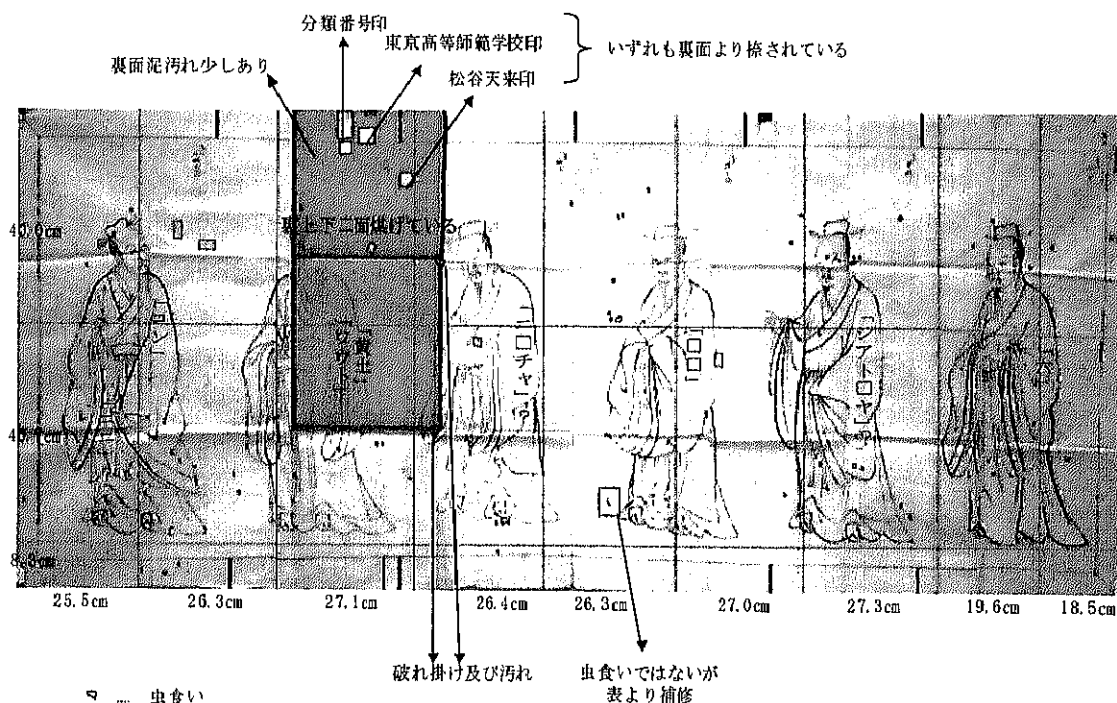
▽ 虫食い

□ 虫食いを裏から紙で補修した痕跡

上下の枠外の短い縦線は人物を描く際につけられたと見られる薄い線



左廿一 コウソウコウジ 公祖句茲
 左廿二 ケンセイ 縣成
 左廿三 エンキウ 燕俔
 左廿四 ガンボク 顔之僕
 左廿五 カクカイ 樂歎
 左廿六 キン 邇巽

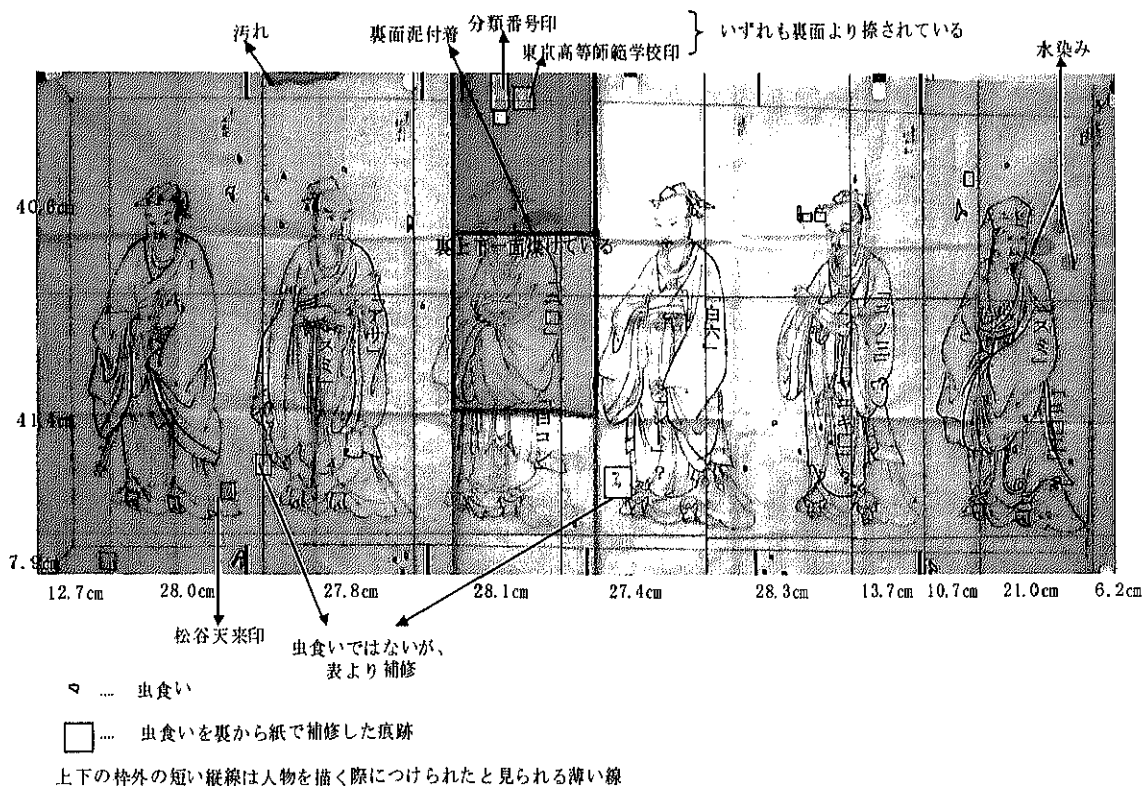


上下の枠外の短い縦線は人物を描く際につけられたと見られる薄い線

挿図6 「左ノ七」 六尺五寸八分



先備左一 サキウマイ 左丘明
 先備左二 コクシヤウセキ 穀梁赤
 先備左三 コウトウセイ 高堂生
 先備左四 モツチャウ 毛萇
 先備左五 トシシヨウ 杜子春
 先備左六 オウトウ 王通





先儒左七
歐陽脩
マウヤウシュ

先儒左八
楊時
ヤウジ
八十口

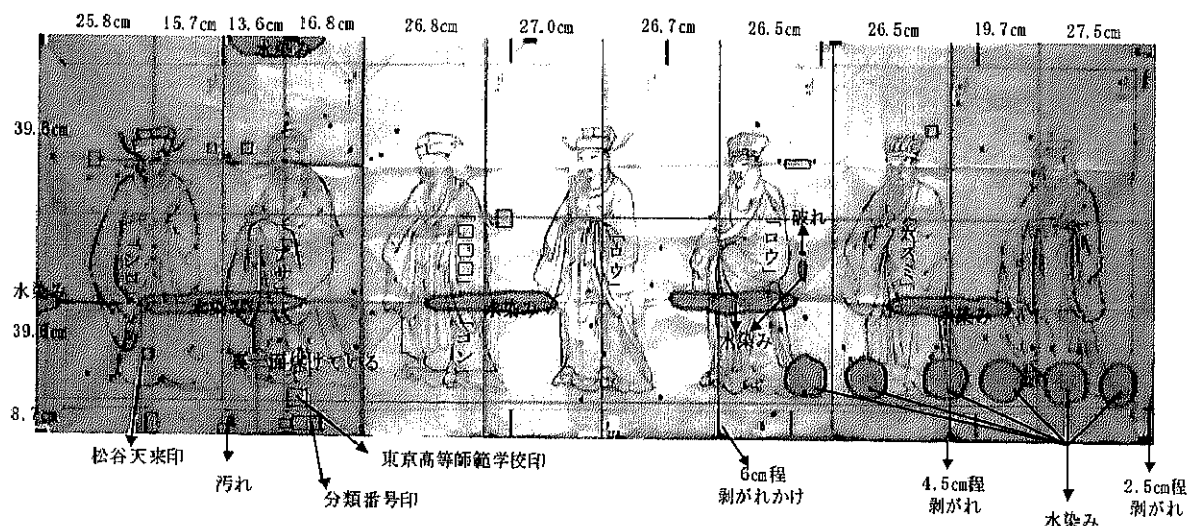
先儒左九
陸九淵
リクキウエン

先儒左十
蔡沈
サイチン

先儒左十一
許衡
キョコウ

先儒左十二
陳獻章
チンケンシャウ

先儒左十三
王守仁
オウシュジン



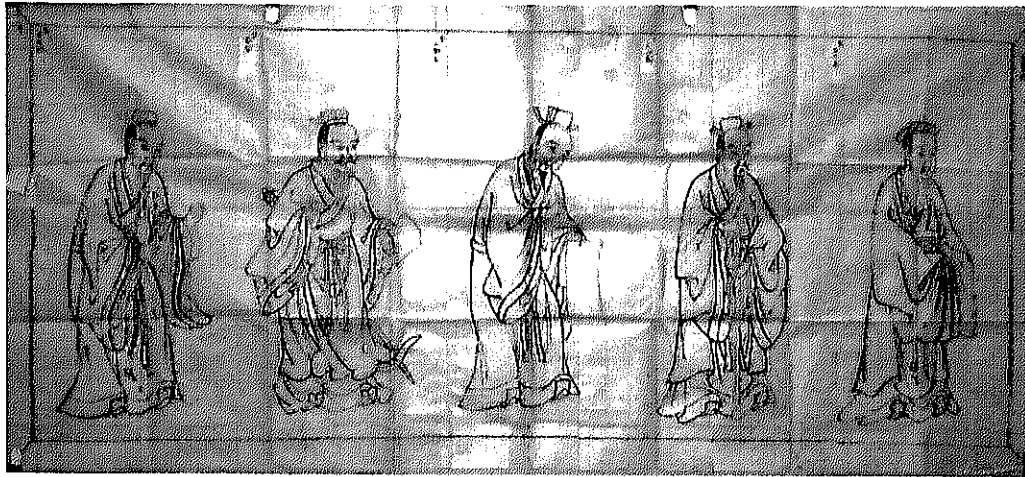
印はいずれも裏面より捺されている

☐ 虫食い

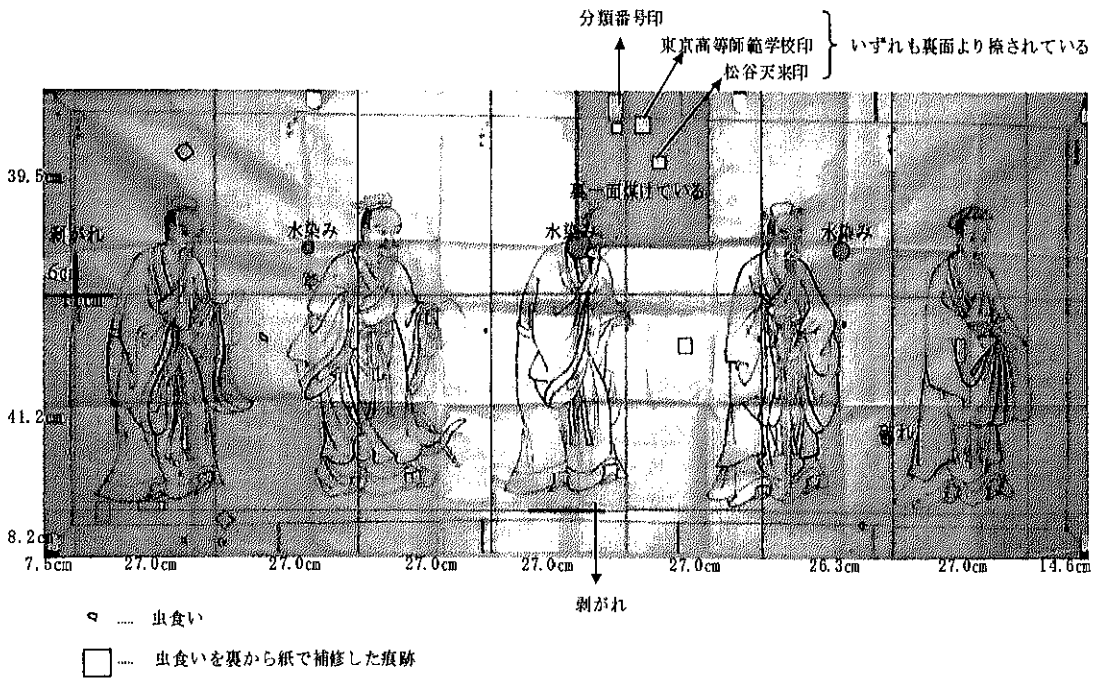
□ 虫食いを裏から紙で補修した痕跡

上下の枠外の短い縦線は人物を描く際につけられたと見られる薄い線

挿図8 「右ノ二」 六尺五寸八分



右一 フツフサイ 宍不斉
 右二 コウヤチヤウ 公治長
 右三 ニウセキスイ 公哲哀
 右四 コウサイ 高柴
 右五 シバコウ 司馬耕



○ 虫食い
 □ 虫食いを裏から紙で補修した痕跡

上下の枠外の短い縦線は人物を描く際につけられたと見られる薄い線

挿図9 「右ノ二」 六尺七寸



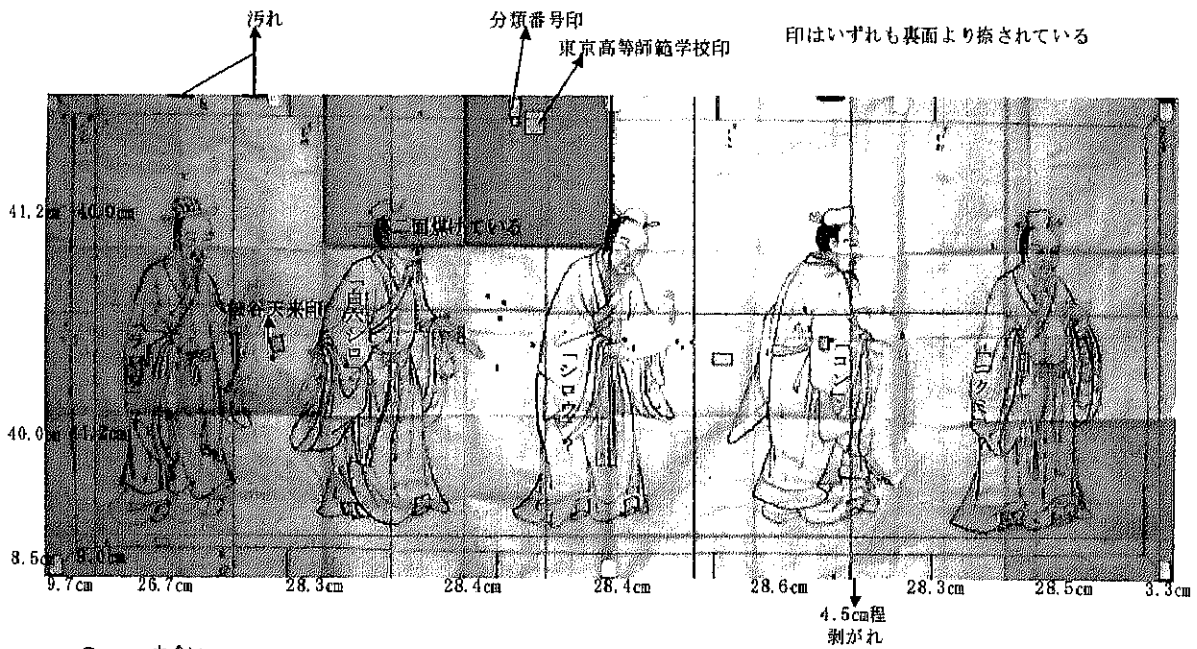
右十
コウソンリヤウ
公孫龍

右九
ソウトク
曹卣

右八
ガンシン
顔辛

右七
フバキ
巫馬期

右六
ニウジャク
有若



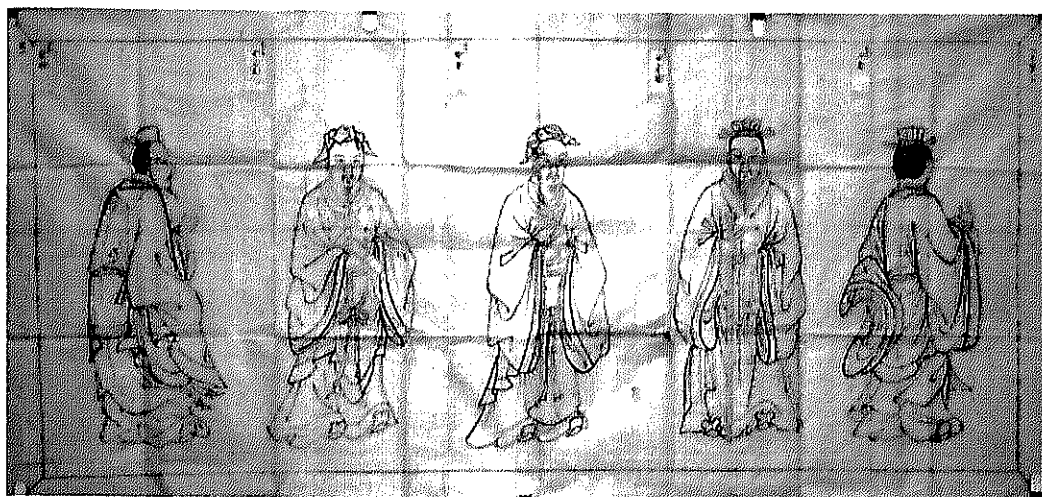
○ 虫食い

□ 虫食いを裏から紙で補修した痕跡

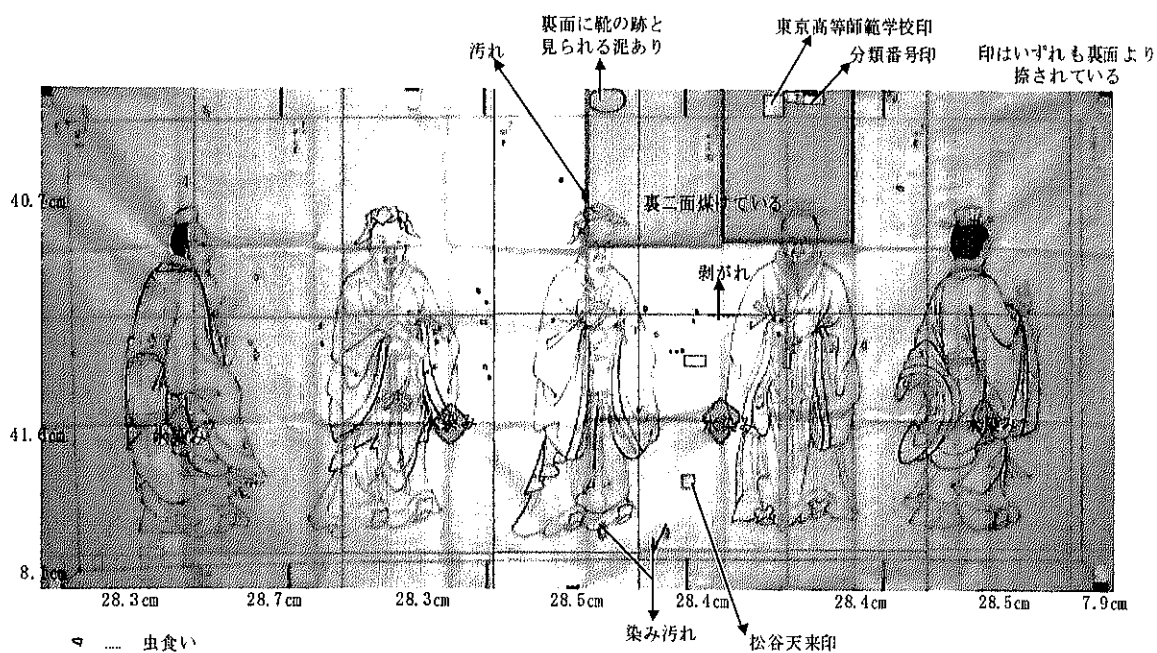
上下の枠外の短い縦線は人物を描く際につけられたと見られる薄い線

挿図10 「右ノ四」

六尺五寸八分

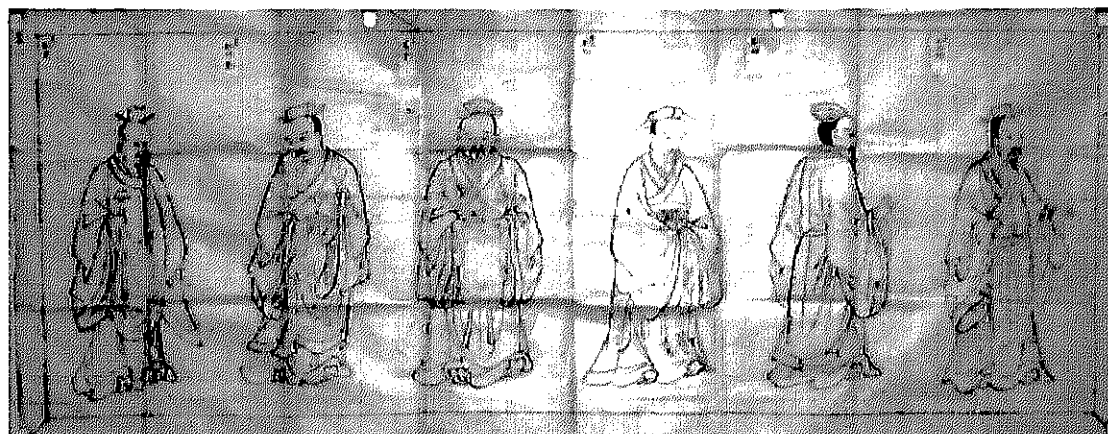


右廿 エイキ 榮旂
 右十九 カンホコク 罕父黒
 右十八 チャウケン 鄙單
 右十七 コウケンテイ 公肩定
 右十六 コウケン 后度

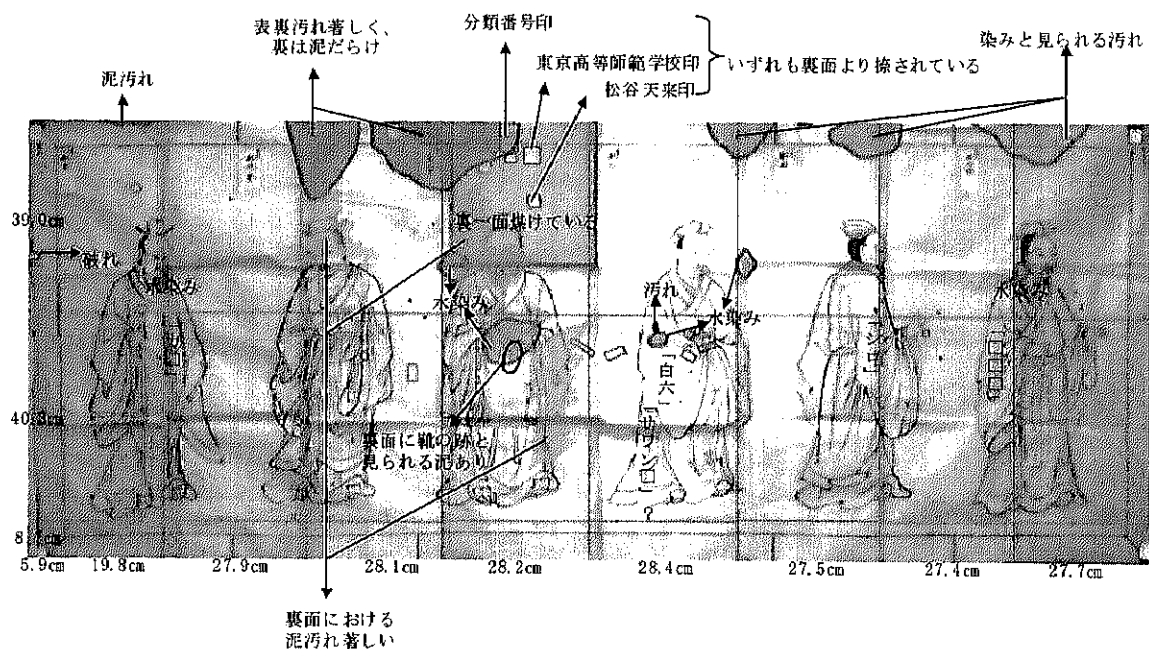


- ◁ 虫食い
- 虫食いを裏から紙で補修した痕跡

上下の枠外の短い縦線は人物を描く際につけられたと見られる薄い線

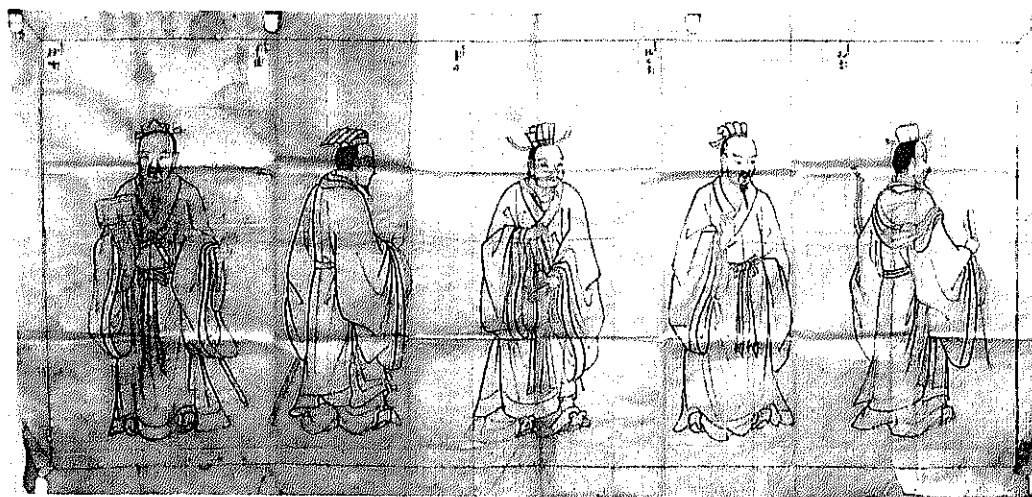


右廿六 狄黒 (テキコク)
 右廿五 叔仲會 (シユクナクワイ)
 右廿四 廉潔 (レンセツ)
 右廿三 原亢 (ゲンコウ)
 右廿二 鄭國 (テイコク)
 右廿一 左人郢 (サンシテイ)

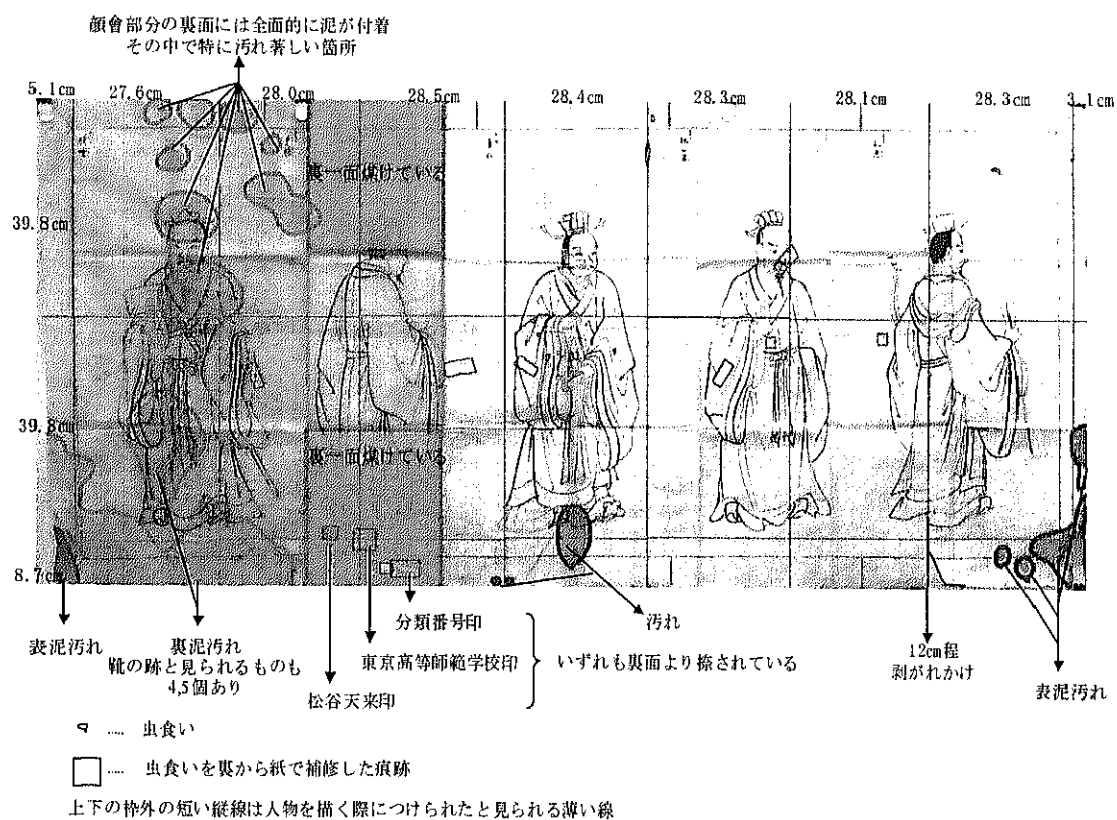


□ ... 虫食い
 □ ... 虫食いを裏から紙で補修した痕跡
 上下の枠外の短い縦線は人物を描く際につけられたと見られる薄い線

挿図12「右ノ六」 六尺五寸八分



右三十一 顔會
ガククワイ
右三十 申根
シンクウ
右廿九 秦非
シンヒ
右廿八 施之常
シシヤウ
右廿七 孔忠
コウチュウ

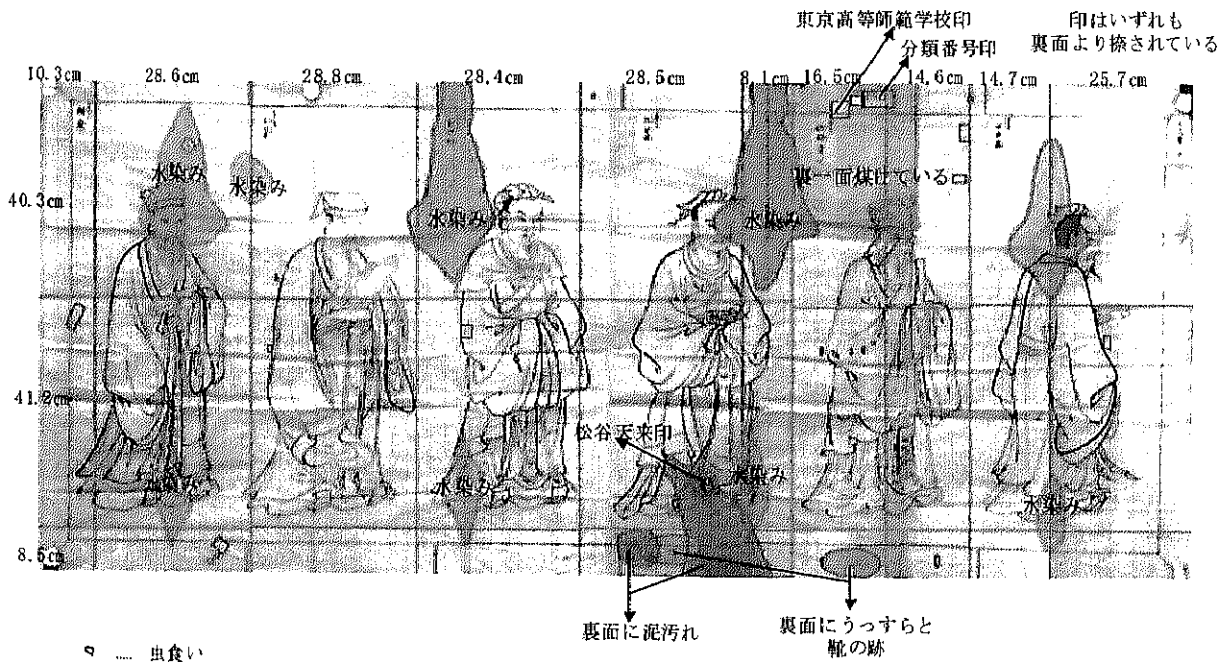
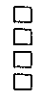


挿図13 「右ノ七」

六尺五寸八分

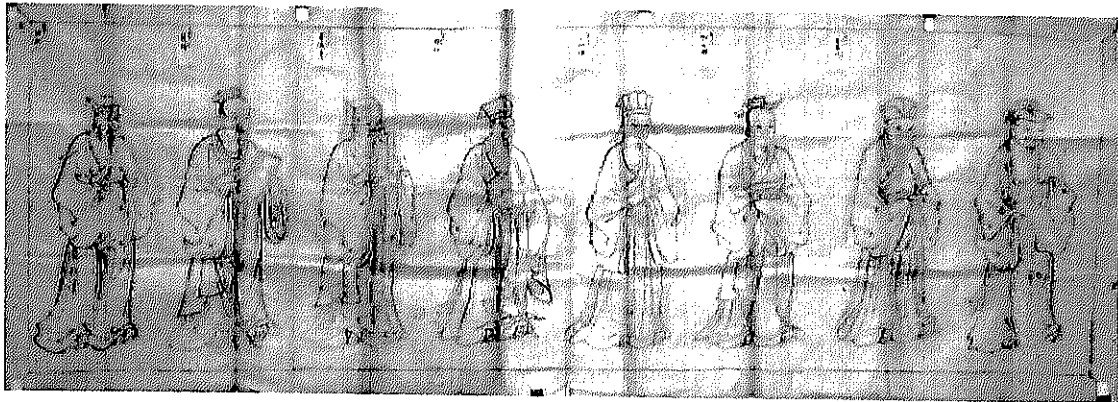


先備右六 韓愈 カンユ
 先備右五 后蒼 コウサウ
 先備右四 董仲舒 タウチウシュ
 先備右三 孔安國 コウアンコク
 先備右二 伏勝 フクサク
 先備右一 公羊高 クヤウコウ



○ 虫食い
 □ 虫食いを裏から紙で補修した痕跡
 上下の枠外の短い縦線は人物を描く際につけられたと見られる薄い線

挿図14 「右ノ八」 八尺三寸五分



先儒右十四
コキヨジン
胡居仁

先儒右十三
センセン
薛瑄

先儒右十二
シントクシウ
真徳秀

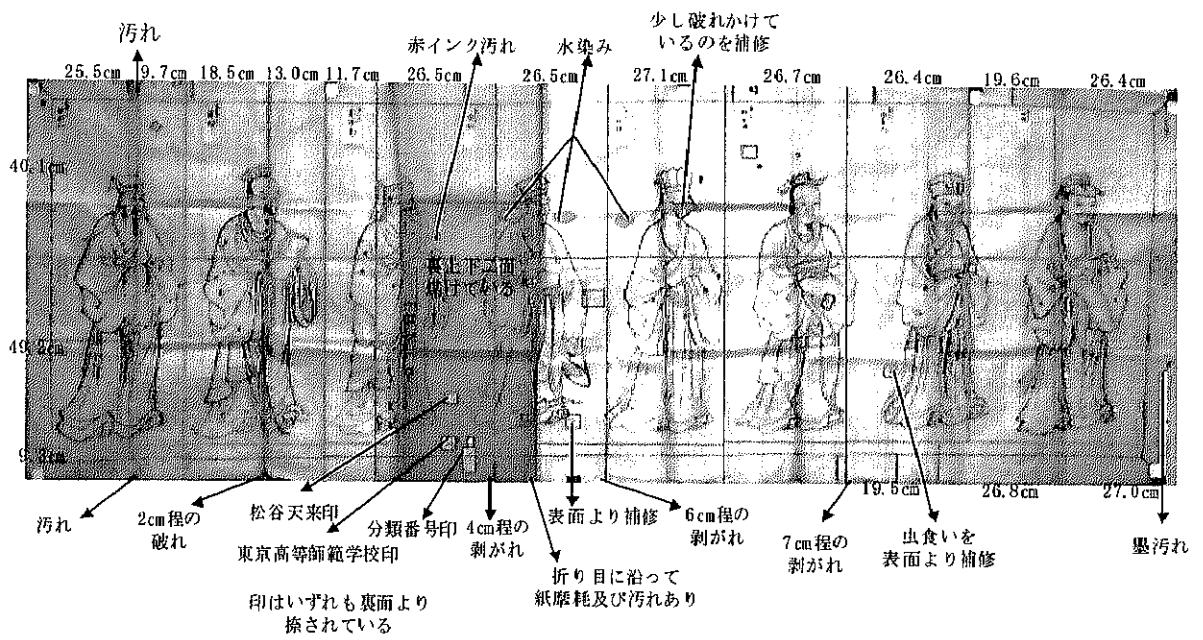
先儒右十一
チャウシキ
張栻

先儒右十
リョウケン
呂祖謙

先儒右九
コアンコク
胡安國

先儒右八
シバコウ
司馬光

先儒右七
コクワン
胡瑗



▽ 虫食い

□ 虫食いを裏から紙で補修した痕跡

上下の枠外の短い縦線は人物を描く際につけられたと見られる薄い線

插图15 (左ノ四)の紙背より撮影)

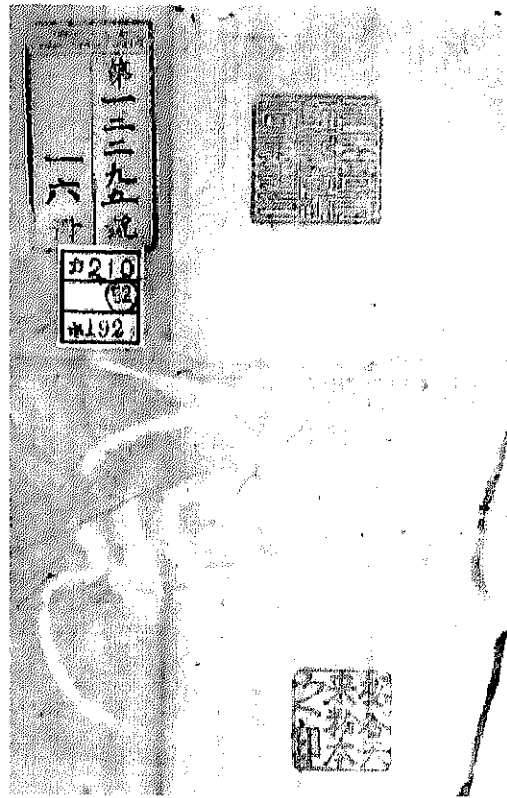
右上・東京高等師範学校図書館印

左上・東京高等師範学校時に捺された分類番号印及び

東京文理科大学時に貼られた分類番号シール

右下・松谷天来粉本之印

中程には、「焼」の文字が白墨で記されている



正位配享從祀諸賢備位方位次序圖

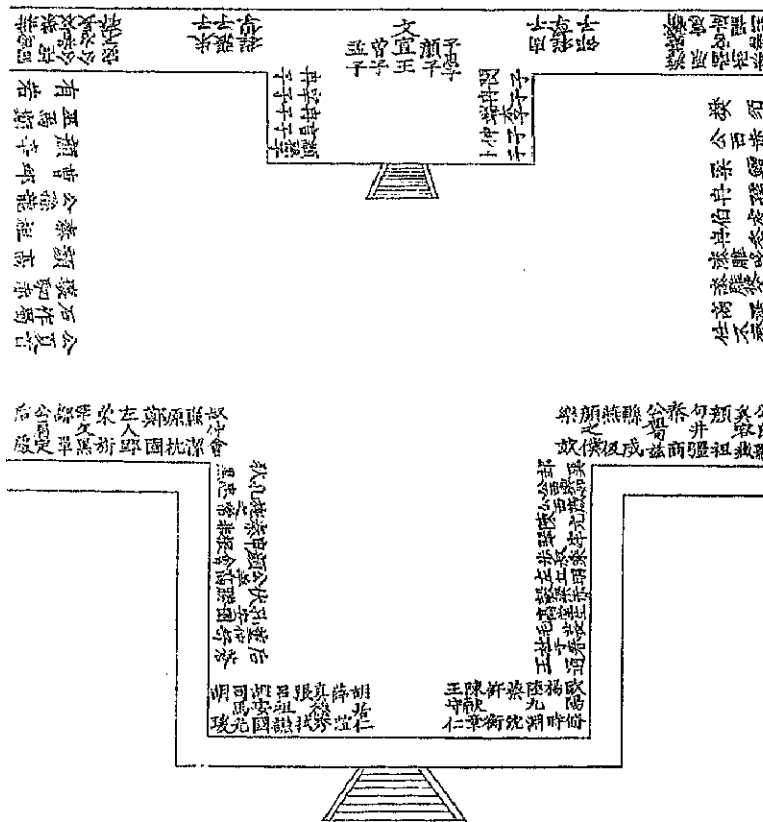


插图16 《昌平廟学図》(『昌平志卷第一 廟図誌』より)